

3 鳥 類

哺乳類
鳥 類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝 類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻 類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

1. 三重県の鳥類相

1-1. 概要

鳥類は平地や伊勢湾岸に生息するものは比較的人目に付きやすく、関心を持つ人も多く、他の分類群の生物に比べ県内での生息状況はよく把握できていると考えられる。鈴鹿山脈、台高山地などの山岳部や離島については今回は調査期間と予算の関係もあり十分な調査はできなかった。

現在までに三重県で確認されている鳥類は繁殖している外来種を含めると 376 種である。この内、123 種類 (33%) はいわゆる迷鳥で、三重県で継続的に繁殖または越冬している種類と、渡りの中継地として継続的に利用している種類は、合わせて 254 種類 (68%) である。

このうち留鳥はクマタカ、オオタカはじめ 83 種類 22%、夏鳥はサシバ、ハチクマはじめ 39 種類 10%、冬鳥はハイイロチュウヒはじめ 83 種類 22%、旅鳥はホウロクシギはじめ 49 種類 13% である。冬鳥と旅鳥を合わせると 132 種類 52% と半分を越え、本県は鳥類の繁殖地としてはもちろん、越冬地、渡りの中継地としても重要であることがわかる。

三重県は南北に細長く、森林については、鈴鹿山脈や台高山脈のブナ林、トウヒ林などの亜高山帯、低山帯から低地帯の、里山、海岸林と多様性に富み、地形も、山地、丘陵地、平野、海岸と多様で、特に海岸は、干潟から砂浜、磯、島嶼群など多様性に富んでいる。このため鳥類相も多様性に富んでいる。

藤原岳から連なる鈴鹿山脈は布引山地、室生山地、高見山地と連なり、台高山脈を含む紀伊山地の脊梁山地となっている。鈴鹿山脈、布引山地、高見山地の山頂付近はブナ林、台高山脈の山頂付近はブナ林やトウヒ林がわずかに残されており、コルリ、コマドリ、ビンズイなど亜高山帯特有の野鳥が繁殖し、イヌワシ、クマタカなど急峻な山岳地帯を主な生息地とする猛禽類が生息している。これら脊梁山地に連なる低山帯はスギ・ヒノキ人工林が多いが、アカマツ林、雑木林、照葉樹林が所々に残されており、オオタカ、ハチクマなどの猛禽類が繁殖している。特に南勢地方には広大な照葉樹林が残されており、ヤイロチョウ、アカショウビン、サンコウチョウなど希少な鳥類が繁殖している。また、丘陵地帯はアカマツ林や雑木林が多く、ホオジロ、ウグイスが優占しているところが多く、サシバなどの猛禽類が生息している。伊勢平野、伊賀盆地などの平地は、農耕地が多いが河畔林や比較的広い河原が残された河川には、猛禽類やイカルチドリなどが繁殖している。また、キアシシギ、アカアシシギなどのシギ・チドリ類の渡来地ともなっており、クサシギ、タシギなど多くの冬鳥が越冬している。海岸は、伊勢湾岸は砂浜が大部分で、比較的広い砂浜が残されている四日市市の吉崎海岸や津市の白塚海岸、田中川、安濃川河口付近などは、シロチドリ、コチドリなどの繁殖地となっており、ハマシギやミュビシギなどの渡来地、越冬地となっている。朝明川や櫛田川などの伊勢湾にそそぐ各河川の河口や鳥羽市の池の浦湾、英虞湾、紀北町の矢口浦、尾鷲湾など大きく入り組んだ入り江の奥には砂泥質の干潟が発達しており、ホウロクシギなど多くのシギ・チドリ類の渡来地となっている。志摩半島から東紀州にかけては、磯浜や島嶼が多く、カンムリウミスズメ、ウチヤマセンニュウ、カラスバトなど特有の鳥類が生息している。広大な砂利浜である熊野市から熊野川河口までの七里御浜は海岸浸食が著しく、生息している鳥類は少ない。

1-2. すでに絶滅した種類

古事記、日本書紀には、日本武尊が能褒野^{のぼの}（現在の亀山市か鈴鹿市）で死去し、白鳥となって大和の方向に飛び去ったと書かれている。ハクチョウ類は、古代には近畿一円で普通に見られていたようである。また、ガン類、ツル類、コウノトリ、トキも絵画などに良く描かれており、江戸時代まではごく普通に生息していたようである。

江戸時代には、特に白子（現在の鈴鹿市）、松阪（現在の松阪市）など紀州藩の飛び地であったところは、鷹狩りに使うオオタカやクマタカが巢をかけたなら必ず奉行所に届け出、名主が責任を持たされるなど厳重に保護され、ツル類も冬期に多数渡来し、渡来中は専属の侍が餌を与え、人の立入を厳重に禁止していた。また、近隣では火を焚いたり、発砲することはもちろん、歌舞音曲など大きな音を出すことも厳禁し、藤堂藩、神戸藩（現在の鈴鹿市）、桑名藩など近隣の他藩にまでその禁令は及び、餌となる魚介類の採集を厳禁するなど、厳重に保護されていた。そのため、マガン、オオヒシクイなどのガン類も多かったようである。現在では、タカ類は激減し、コクガン以外のガン類とハクチョウ類のコハクチョウは数年に1度程度まれに渡来するのみとなっており、ツル類はナベヅルが一時期伊勢平野南部に渡来していたが、近年は減少している。

2. 調査の概要

2-1. 調査方法

2005 年度の初版時には、日本野鳥の会三重県支部の会員により繁殖期と越冬期のラインセンサス調査を実施するとともに、これまでの観察情報を集めて整理し、また、過去の文献を精査した。また、データが不足していた離島や海上、山岳地帯の鳥類については、特に調査を実施した。それらを総合的に判断し、レッドリスト記載種を選定した。2015 年の改訂にあたっては、更に調査し、寄せられた記録を精査した。今回は前回までのような十分な現地調査はできず、日本野鳥の会三重の野鳥観察会の記録と会員の証言、記録をデー

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

データベース化して分析し、主な参考資料とした。

2-2. レッドリスト記載種選定

選定にあたって、数年に一度程度しか観察されない種は県内を継続的には利用していないものと考えて、希少なものであっても対象から除外し、ほぼ毎年あるいは2～3年に一度観察され、三重県で継続的に繁殖または越冬している種、または、三重県を渡りの中継地として継続的に利用している種を選定の対象に挙げ、それらの生息状況を観察記録を元にチェックシートで確認して減少傾向、生息環境の状況などを総合的に判断しランクを決定した。

3. 絶滅危惧種の概要

3-1. 選定された種の現状

今回レッドデータブック記載種 74 種のうち、猛禽類はオオタカ、クマタカはじめ 20 種類 22%である。三重県で記録された猛禽類 25 種の 80%にあたり、この仲間の大部分が危機的状況にあることがわかる。猛禽類は食物連鎖の頂点に位置しているため、やはり自然環境の悪化を象徴的に示しているといえよう。

環境別に見ると、干潟や砂浜、河原などに生息している種類は、シロチドリ、コアジサシはじめ 19 種類（掲載種の 26%）、森林に生息している種類はヤイロチョウ、アカショウビンはじめ 27 種類（36%）、主に淡水域に生息している水鳥は、オシドリ、ヒクイナはじめ 11 種類（15%）、アシ原を主な生息場所としている種類はチュウヒ、ハイイロチュウヒはじめ 3 種類（4%）、海域を生息地としている種類はカンムリウミスズメ、ミサゴはじめ 3 種類（4%）、離島にのみ生息している種類は、カラスバトとウチヤマセンニュウなど 3 種類（4%）、草原や灌木林を主な生息地としている種類は 6 種類（8%）である。

県内で確認されている迷鳥を除く森林性の種類は 83 種であるが、32%の 27 種がレッドリストに挙げられており、開発やスギ・ヒノキ植林地の増加と放棄による森林の自然環境の悪化の深刻さをよく示している。また、県内で確認されている水鳥は 120 種であるが、そのうちの 33 種、レッドリスト種のうち 44%が水鳥である。特に、干潟や砂浜、河原といった裸地に生息する種類の減少が問題である。これはダムや井堰による河川の土砂流下阻害による広い河原の消滅、海岸浸食の増加による自然環境の悪化を象徴的に示していると言えよう。県内で特に希少となっている自然環境は、こうした河原や砂浜など、広い面積の裸地であり、こうした環境にのみ営巣するコアジサシ、シロチドリ、イカルチドリ、コチドリなどが危機的状況にあると言える。こうした種類は木曾岬干拓地、四日市港などの埋立工事中の埋立地や、造成工事中の造成地などの裸地にも営巣し、一時的に増えることがあるが、こうした環境は工事途中に一時的に出来たものであり、一時的に増えたからと言って、危機的状況を脱したとはいえない。

3-2. 環境省 2020 掲載種であるが、本県では LC とした種類

・オオセグロカモメ（環境省 NT）：全国的には減少が確認され、本県では近縁のセグロカモメ、ウミネコ、ユリカモメなどより非常に少ないことが調査で明らかになったが、近年減少したのかは不明のため LC とした。

・オオアジサシ（環境省 VU）：日本の繁殖地は非常に限られているが、本県では近年増加傾向にあることから LC とした。

・ケリ（環境省 DD）本県では伊勢平野には広く分布し、生息環境も危機的状況にはないと考えられたため LC とした。

3-3. 保護対策

食物連鎖の頂点にある猛禽類を保護することは生態系そのものを守ることであり、そのためには多様性のある自然環境を取り戻すことである。また、過去には大幅に減少した干潟や広い面積のアシ原の復元が必要である。すでに、木曾岬干拓地では、1973 年の干陸以来 36 年にわたり放棄されたので極めて良好な自然が回復し、チュウヒが 3 つがいも繁殖するという全国有数の良好な自然が復元されており、自然復元のたいへん良い例となっているが、その後の開発でチュウヒの営巣数が激減し問題である。

農耕地における動植物の激減、特にメダカ、タニシ、ドジョウに象徴される水生生物の激減の影響は深刻で、トキが絶滅し、コウノトリが絶滅の危機にあるのもこのためである。同様にサギ類もレッドリストに 5 種が記載され、県内で確認されている迷鳥以外のサギ類 10 種のうちの半数となっている。これらの種類の生息環境を改善するには 2003 年より農林水産省が進めている「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を早く県内全域に実施することが必要である。従来の圃場整備などの農地改良事業は水路をパイプやコンクリート三面張りにして、水田と排水路も 80 cm 以上の落差を義務づけ、生物の行き来を大きく阻害していた。これらの反省の上に立ったこの政策では、水路は土や石のものとし、水田と水路や河川との魚介類の行き来を容易にし、特に希少な動植物の生息環境は保護し、農道工事も自然の豊かな場所は避けようと言う事業である。

また、河川については、1990 年から近自然工法（多自然型河川工法）が行われるようになってきているが、まだまだ自然の復元にはほど遠いものが多く、一層の努力が求められる。

森林については 1951 年の森林法改正により、当時の木材不足解消のため拡大造林政策と言う、全国の森林をスギ、ヒノキ、カラマツの人工林に変える政策が大規模に補助金を伴って行われ、三重県でも急速にス

ギ・ヒノキ植林地への転換が進んだ。しかし、その後 1961 年に木材の輸入が自由化された。林野庁は 1947 年には木材需要の好況のため独立採算性となっていたが、1970 年には赤字に転落した。これに象徴されるように、国産材は売れなくなり、木材不況となり、植林したものの放棄される人工林が増え、間伐や枝打ちがされず、モヤシ林、線香林と言われる状態になり現在に至っている。このような放棄された人工林は下生えも生育せず、従って、昆虫も野鳥もほとんど生息できない森林が大部分になった。これは国土保全の上からも早急な改善が必要である。

今後、このレッドデータブックを基に希少鳥類の保護を進め、これ以上リストに上る種類が増えないように努力し、また、危機的状況にある種類を 1 種類でも減らして行きたいものである。

なお、標準和名、学名及び種の配列については日本鳥学会鳥類目録（2024）により、種の概要や国内外における分布の記載にあたっては清棲（1978）、中村（1995）、高野（1982・1982）などを参考にした。また、県内分布については日本野鳥の会三重「しろちどり」なども参照した。

文 献

- 遠藤公男. 1994. 盛岡藩御狩り日記. 講談社：261p.
- 江崎保男・和田 岳（編）. 2002. 近畿地区・鳥類レッドデータブック—絶滅危惧種判定システムの開発— . 京都大学学術出版会, 京都：255p.
- 橋本太郎. 1980. 三重県鳥類の分布とその生態—記録と標本—：271p. （自刊）
- 橋本太郎. 1983. 三重県鳥類の分布とその生態—記録生体写真集—：209p. （自刊）
- 樋口行雄. 1979. 三重県の鳥類相. 三重県立博物館研究報告, (1)：69-125.
- 伊賀市環境保全市民会議レッドデータブック作成委員会編 2006. 伊賀のレッドデータブック—伊賀の希少動植物— 伊賀市環境保全市民会議.
- 環境庁（編）. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局：550p.
- 環境庁（編）. 1988. 動植物分布調査報告書（鳥類）. （財）日本野鳥の会：491p.
- 環境庁自然保護局・日本野鳥の会. 1988. 動植物分布調査報告書（鳥類の集団営巣地及び集団ねぐら）. （財）日本野鳥の会：268p.
- 環境庁自然保護局生物多様性センター. 1999. 生物多様性調査鳥類調査中間報告書：342p.
- 環境省自然保護局野生生物課. 2020. 改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物—レッドデータブック—2 鳥類. 財団法人自然環境研究センター. 東京：278p.
- 菊岡如幻. 1983. 伊水温故. 上野市古書刊行会. 上野市：427p.
- 清棲幸保. 1978. 日本鳥類大図鑑Ⅲ. 増補改訂版. 講談社：236p.
- 黒田長久（編・監）. 1984. 決定版生物大図鑑鳥類. 世界文化社：399p.
- 三重県立博物館. 1985. 三重県立博物館資料目録自然科学, (3)鳥類：18p.
- 日本鳥学会（目録編集委員会）. 2024. 日本鳥類目録改訂第 8 版：472p.
- 日本野鳥の会三重県支部. 1994～2004. しろちどり. (1)～(47).
- 日本野鳥の会三重県支部. 2001. 身近な自然を守るために：39p.
- 杉浦邦彦. 1986. 三重の野鳥. 三重県その自然と動物, 三重県良書出版会：222-251.
- 植田睦之・奴賀俊光・山嶺優佑. 2023. 全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022年.
- 高野伸二. 1982. フィールドガイド日本の野鳥. （財）日本野鳥の会：342p.
- 鳥類繁殖分布調査会. 2021. 自然環境保全基礎調査 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-2021年.
- 上野秀治. 1999. 四日市と紀州藩鷹場. 四日市市史, (12)：p.109-128.

（武田恵世）

哺乳類

鳥 類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝 類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻 類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

除外種

「三重県レッドデータブック 2015」掲載種のうち、今回の改訂により低懸念（LC）と判定された種、及び評価対象から除外した種とその理由は以下のとおりである。

新レッドリストで低懸念（LC）となった種

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	判定理由
				新	旧		
チドリ目	チドリ科	コチドリ	<i>Charadrius dubius</i>	LC	NT	—	県内にも、全国的にも少数ながら広く分布しており、絶滅の危機にあるとはいえないと判断したため。
チドリ目	シギ科	コアオアシシギ	<i>Tringa stagnatilis</i>	LC	VU	—	毎年少数が秋の渡りの時期に県内を利用するが、日本は本来の生息地（アメリカ大陸）から外れており、世界的には多く、環境省も指定していないため。
スズメ目	ウグイス科	センダイムシクイ	<i>Phylloscopus coronatus</i>	LC	NT	—	この10年生息数に変化はなく、生息環境も危機的状況にはないと考えられたため。
スズメ目	ヒタキ科	コサメビタキ	<i>Muscicapa dauurica</i>	LC	DD	—	県内でも、全国調査でもやや増加傾向にあるため。
スズメ目	ヒタキ科	キビタキ	<i>Ficedula narcissina</i>	LC	NT	—	県内でも、全国調査でもやや増加傾向にあるため。雑木林の放棄により暗い森林が増加したためと考えられる。

新レッドリストで評価対象から除外した種

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	除外理由
				新	旧		
タカ目	タカ科	オジロワシ	<i>Haliaeetus albicilla</i>	除外	CR	VU	県内では生息が長年確認されないため。
タカ目	タカ科	オオワシ	<i>Haliaeetus pelagicus</i>	除外	CR	VU	県内では生息が長年確認されないため。

鳥類レッドリスト

目名	科名	和名	学名	三重県		環境省	掲載頁
				新	旧		
カモ目	カモ科	オシドリ	<i>Aix galericulata</i>	CR (繁殖) VU (越冬)	EN (繁殖) NT (越冬)	DD	51
ハト目	ハト科	カラスバト	<i>Columba janthina</i>	CR	CR	NT	51
チドリ目	チドリ科	シロチドリ	<i>Charadrius alexandrinus</i>	CR (繁殖) EN (越冬)	CR (繁殖) NT (越冬)	VU	51
チドリ目	シギ科	カラフトアオアシシギ	<i>Tringa guttifer</i>	CR	CR	CR	52
チドリ目	カモメ科	ズグロカモメ	<i>Saundersilarus saundersi</i>	CR	CR	VU	52
チドリ目	カモメ科	コアジサシ	<i>Sterna albifrons</i>	CR	CR	VU	53
チドリ目	ウミスズメ科	カンムリウミスズメ	<i>Synthliboramphus wumizusume</i>	CR	CR	VU	53
ペリカン目	サギ科	ササゴイ	<i>Butorides striatus</i>	CR	VU	—	54
タカ目	ミサゴ科	ミサゴ	<i>Pandion haliaetus</i>	CR	NT (繁殖) VU (越冬)	NT	54
タカ目	タカ科	ハチクマ	<i>Pernis ptilorhynchus</i>	CR	EN	NT	54
タカ目	タカ科	チュウヒ	<i>Circus spilonotus</i>	CR	CR (繁殖) VU (越冬)	EN	55
タカ目	タカ科	ハイロチュウヒ	<i>Circus cyaneus</i>	CR	VU	—	55

タカ目	タカ科	イヌワシ	<i>Aquila chrysaetos</i>	CR	CR	EN	56	哺乳類
ハヤブサ目	ハヤブサ科	コチョウゲンボウ	<i>Falco columbarius</i>	CR	EN	—	56	鳥類
ハヤブサ目	ハヤブサ科	ハヤブサ	<i>Falco peregrinus</i>	CR	CR (繁殖) EN (越冬)	VU	56	爬虫類
スズメ目	ヤイロチョウ科	ヤイロチョウ	<i>Pitta nympha</i>	CR	CR	EN	57	両生類
カモ目	カモ科	トモエガモ	<i>Sibirionetta formosa</i>	EN	EN	VU	57	汽水・淡水魚類
ツル目	クイナ科	ヒクイナ	<i>Zapornia fusca</i>	EN	VU	NT	57	昆虫類
チドリ目	ミヤコドリ科	ミヤコドリ	<i>Haematopus ostralegus</i>	EN	NT	—	58	クモ類
チドリ目	シギ科	ヘラシギ	<i>Calidris pygmaea</i>	EN	EN	CR	58	貝類
チドリ目	シギ科	ミュビシギ	<i>Crocethia alba</i>	EN	VU	—	58	甲殻類
チドリ目	シギ科	ハマシギ	<i>Calidris alpina</i>	EN	—	—	59	その他動物
カツオドリ目	ウ科	ヒメウ	<i>Urile pelagicus</i>	EN	—	EN	59	維管束植物
ペリカン目	サギ科	ヨシゴイ	<i>Ixobrychus sinensis</i>	EN	NT	NT	59	蕨苔類
タカ目	タカ科	クマタカ	<i>Nisaetus nipalensis</i>	EN	EN	EN	60	藻類
タカ目	タカ科	オオタカ	<i>Accipiter gentilis</i>	EN	VU	NT	60	キノコ
タカ目	タカ科	サシバ	<i>Butastur indicus</i>	EN	EN	VU	60	EX
スズメ目	ウグイス科	ウチャマセンニュー	<i>Locustella pleskei</i>	EN	EN	EN	61	EW
スズメ目	ヒタキ科	コマドリ	<i>Larvivora akahige</i>	EN	NT	—	61	CR
カモ目	カモ科	コクガン	<i>Branta bernicla</i>	VU	VU	VU	61	EN
カモ目	カモ科	ツクシガモ	<i>Tadorna tadorna</i>	VU	—	VU	62	VU
ツル目	ツル科	ナベヅル	<i>Grus monacha</i>	VU	VU	VU	62	NT
チドリ目	チドリ科	タゲリ	<i>Vanellus vanellus</i>	VU	NT	—	62	DD
チドリ目	チドリ科	イカルチドリ	<i>Charadrius placidus</i>	VU	VU	—	63	
チドリ目	シギ科	ハウロクシギ	<i>Numenius madagascariensis</i>	VU	NT	VU	63	
チドリ目	シギ科	ダイシャクシギ	<i>Numenius arquata</i>	VU	VU	—	63	
チドリ目	シギ科	アカアシシギ	<i>Tringa totanus</i>	VU	VU	VU	64	
ペリカン目	サギ科	チュウサギ	<i>Ardea intermedia</i>	VU	VU	NT	64	
フクロウ目	フクロウ科	アオバズク	<i>Ninox japonica</i>	VU	VU	—	64	
ブッポウソウ目	カワセミ科	アカショウビン	<i>Halcyon coromanda</i>	VU	VU	—	65	
ブッポウソウ目	カワセミ科	ヤマセミ	<i>Megaceryle lugubris</i>	VU	NT	—	65	
キツツキ目	キツツキ科	オオアカゲラ	<i>Dendrocopos leucotos</i>	VU	VU	—	65	
スズメ目	ヒタキ科	コルリ	<i>Larvivora cyane</i>	VU	VU	—	66	
キジ目	キジ科	ヤマドリ	<i>Syrnaticus soemmerringii</i>	NT	NT	—	66	
チドリ目	セイタカシギ科	セイタカシギ	<i>Himantopus himantopus</i>	NT	CR	VU	66	

哺乳類	チドリ目	シギ科	タカブシギ	<i>Tringa glareola</i>	NT	—	VU	67
鳥類	チドリ目	シギ科	ツルシギ	<i>Tringa erythropus</i>	NT	—	VU	67
	ペリカン目	サギ科	クロサギ	<i>Egretta sacra</i>	NT	NT	—	67
爬虫類	タカ目	タカ科	ハイタカ	<i>Accipiter nisus</i>	NT	NT	NT	68
両生類	フクロウ目	フクロウ科	コミミズク	<i>Asio flammeus</i>	NT	NT	—	68
汽水・淡水魚類	フクロウ目	フクロウ科	フクロウ	<i>Strix uralensis</i>	NT	NT	—	68
昆虫類	スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ	<i>Pericrocotus divaricatus</i>	NT	VU	VU	69
クモ類	スズメ目	カササギヒタキ科	サンコウチョウ	<i>Terpsiphone atrocaudata</i>	NT	NT	—	69
貝類	スズメ目	ヒタキ科	クロツグミ	<i>Turdus cardis</i>	NT	NT	—	69
甲殻類	キジ目	キジ科	ウズラ	<i>Coturnix japonica</i>	DD	DD	VU	70
その他動物	ヨタカ目	ヨタカ科	ヨタカ	<i>Caprimulgus jotaka</i>	DD	DD	NT	70
維管束植物	アマツバメ目	アマツバメ科	ハリオアマツバメ	<i>Hirundapus caudacutus</i>	DD	—	—	70
蕨類	ツル目	クイナ科	クイナ	<i>Rallus aquaticus</i>	DD	NT	—	70
藻類	ツル目	クイナ科	バン	<i>Gallinula chloropus</i>	DD	—	—	70
キノコ	チドリ目	タマシギ科	タマシギ	<i>Rostratula benghalensis</i>	DD	NT	VU	70
EX	チドリ目	シギ科	オジロトウネン	<i>Calidris temminckii</i>	DD	DD	—	70
EW	チドリ目	シギ科	オオジシギ	<i>Gallinago hardwickii</i>	DD	DD	NT	70
CR	チドリ目	ウミスズメ科	ウミスズメ	<i>Synthliboramphus antiquus</i>	DD	EN	CR	70
EN	ペリカン目	トキ科	ヘラサギ	<i>Platalea leucorodia</i>	DD	—	—	71
VU	ペリカン目	トキ科	クロツラヘラサギ	<i>Platalea minor</i>	DD	CR	EN	71
NT	ペリカン目	サギ科	ミゾゴイ	<i>Gorsachius goisagi</i>	DD	VU	VU	71
DD	ペリカン目	サギ科	ゴイサギ	<i>Nycticorax nycticorax</i>	DD	—	—	71
	フクロウ目	フクロウ科	コノハズク	<i>Otus sunia</i>	DD	VU	—	71
	フクロウ目	フクロウ科	オオコノハズク	<i>Otus semitorques</i>	DD	DD	—	71
	ブッポウソウ目	ブッポウソウ科	ブッポウソウ	<i>Eurystomus orientalis</i>	DD	DD	EN	71
	スズメ目	ムシクイ科	メボソムシクイ	<i>Phylloscopus xanthodryas</i>	DD	—	—	71
	スズメ目	ムシクイ科	オオムシクイ	<i>Phylloscopus examinandus</i>	DD	—	DD	71
	スズメ目	クイタダキ科	クイタダキ	<i>Regulus regulus</i>	DD	VU	—	72
	スズメ目	ツグミ科	マミジロ	<i>Geokichla sibirica</i>	DD	—	—	72

オシドリ

Aix galericulata

カモ目 カモ科

【選定理由】繁殖期には県内では1～2ヶ所で営巣しているのみであり、冬季の個体数は1,000以下である。

【種概要】ごく少数が留鳥。主に冬鳥。全長約45 cm。オスの繁殖羽は、後頭の羽毛は冠羽状で、銀杏羽がある。メスは灰褐色の斑紋があり、目の周囲に白勾玉形の斑紋がある。常緑広葉樹が水面を覆う水辺を好み、カシヤシイなどのドングリを好んで採食する。営巣は大木の樹洞で行う。

【分布】中国東北部から日本で繁殖し、西日本から中国南部で越冬する。

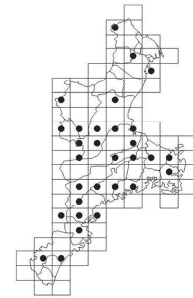
【現況・減少要因】近年の確実な繁殖記録は津市美杉町の1か所のみである。冬期には、県内各地で見られるが、他のカモ類に比べて個体数は少ない。減少要因は、営巣可能な樹洞のできる大木、餌資源となる広葉樹林、河畔林や池縁の森林の減少と考えられる。

【保護対策】営巣可能な大木や広葉樹林（特にドングリの実る種類）、休息場ともなる河畔林や池縁の森林を保護し、復元することである。

【文献】28, 34.

(武田恵世)

(写真：四日市市，2021年，三曾田明撮影)



三重県 2025
CR (繁殖)
VU (越冬)

三重県 2015
EN (繁殖)
NT (越冬)

環境省 2020
DD

カラスバト

Columba janthina

ハト目 ハト科

【選定理由】紀北町の3か所の島嶼のみで繁殖しており、県内では個体数が極めて少ない。

【種概要】留鳥。全長約40 cm。ドバトより大きく、尾は比較的長い。雌雄同色。体は黒色で紅紫色や緑色の金属光沢がある。嘴は先が淡黄色で基部付近が淡青緑色。足は赤い。頭部はヘルメットをかぶったような感じの膨らみがある。照葉樹林に生息し、おもにタブ、ヤマモモなどの実を食べる。繁殖期は主に2～9月。よく茂った照葉樹林の樹上に皿状の巣をつくる。

【分布】日本と朝鮮半島南部の主に島嶼、済州島、鬱陵島に分布する。国内では、留鳥として本州中部以南の島嶼に分布する。

【現況・減少要因】紀北町の大島、鈴島、赤野島、大エスキ島で繁殖しているだけである。冬期にはこの島に近い内陸の照葉樹林で見られることもある。減少要因は、照葉樹林の減少により木の実が激減したためと考えられる。

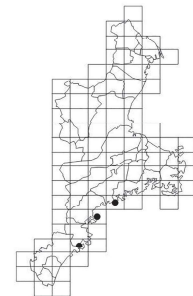
【保護対策】現在の生息環境を保護し、さらに照葉樹林を復元する必要がある。

【特記事項】国指定天然記念物、県指定希少野生動植物種。

【文献】5, 6, 10, 29, 34.

(武田恵世)

(写真：東京都，2016年，西村四郎撮影)



三重県 2025
CR

三重県 2015
CR

環境省 2020
NT

シロチドリ

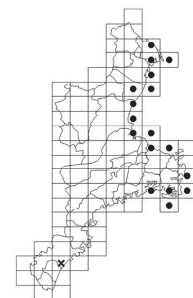
Charadrius alexandrinus

チドリ目 チドリ科

【選定理由】かつては三重県下の砂浜海岸、海寄りの造成地など人口の裸地で普通に繁殖していたが、近年繁殖個体が減り、かつ成功例は多くない。繁殖地点は10以下であると考えられる。また、越冬個体も減少している。

【種概要】全長17.5 cm。砂浜海岸、干潟で周年普通に見られる小型のチドリ。首の黒い輪は胸で途切れている点でコチドリなどと区別できる。冬には大きな群になることがある。繁殖は主に内湾に面した砂浜海岸の砂地、草のまばらに生えた場所、あるいは海に近い埋め立て地などの人工的な裸地であり、地面を少しくぼませ、貝殻などを少し敷いて卵を産み、抱卵する。卵は保護色であり、巣は極めて見つけにくい。海岸でも草深い場所、松林内に巣を作らない。抱卵中に巣に近寄ると歩いて逃げる。人が巣の近くに長く留まると抱卵を放棄する。また、生まれたヒナはすぐに巣を離れ、親について餌を取る。約3週間て飛べるようになる。

【分布】広く温帯で繁殖し、北方で繁殖するものは南で越冬する。日本各地の海辺で繁殖し、越冬する。1995年11月に熊本で標識された個体が、1996年7月の繁殖期に四日市吉崎海岸で回収捕獲されているので、繁殖後には南で越冬する渡りをしていると考えられる。三重県の海岸での繁殖個体は減少していると考えられる。なお、地図に示されているのは個体が記録された生息地点であり、繁殖の確認された地点ではない。



三重県 2025
CR (繁殖)
EN (越冬)

三重県 2015
CR (繁殖)
NT (越冬)

環境省 2020
VU

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蕨苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

【現況・減少理由】かつては津市などの自然砂浜海岸で繁殖していた。1990年代後半には20羽前後のヒナが津市の海岸で確認されていた。しかし、近年は数羽程度に減少している。また、埋め立て地などで集団繁殖する場合もあったが、近年は埋め立て地がなくなっている。さらに、海辺のレジャーが盛んになり、繁殖する自然の砂浜海岸に人が多く立ち入り、繁殖環境が悪化した。海岸護岸の改修などで砂浜海岸が縮小した場合もある。カラス類など捕食者が増えたことも減少の要因であろうと推定される。その他にも繁殖を阻害する要因があらうと考えられる。繁殖数の回復の兆候は見られない。また、越冬個体も近年では200羽を下回っている。

【保護対策】繁殖期には繁殖地である砂浜海岸での人の活動を制限する。砂浜海岸をこれ以上減らさない。海岸清掃が繁殖の妨げになっている可能性があるため、繁殖期以外に行うよう、申し入れる。

【特記事項】県鳥。

【文献】8, 9。

(平井正志)

(写真：四日市市，2017年，三曾田明撮影)

カラフトアオアシシギ

チドリ目 シギ科

Tringa guttifer

【選定理由】県内で稀に渡来を認める。世界的に絶滅の危機にある種類であり、本県は渡り途中の生息地として重要であると考えられるため。

【種概要】全長29～32cm。腹部、腰は白く、尾羽は白く黒い横縞が入る。嘴は黒色で太く、やや上方へ反る。基部は黄緑がかる。後肢は黄緑色で、アオアシの由来になっている。幼鳥は上面が灰褐色の羽毛で覆われ、羽縁が白い。夏羽は上面が黒褐色の羽毛で覆われ、羽縁が白い。喉から胸部にかけて黒褐色の斑紋が入り、英名spotted(斑紋のある)の由来になっている。冬羽は上面が灰色の羽毛で覆われ、淡褐色の縦縞が入る。

【分布】ロシアのサハリン(樺太)のみで繁殖し、インド、バングラデシュ、マレー半島で越冬する。日本では主に秋の渡りの時期に稀に観察される。

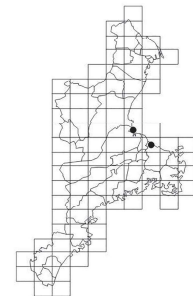
【現況・減少要因】伊勢湾岸の泥質干潟に稀に渡来を認めるが、泥質干潟が河川や海岸の浚渫工事などで消滅したり、砂質化したりして、減少傾向にある。

【保護対策】干潟、特に泥質干潟を保護すること。

【文献】22, 23, 24, 27, 28, 29, 34。

(武田恵世)

(写真：松阪市，2018年，西村四郎撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

CR

ズグロカモメ

チドリ目 カモメ科

Saundersilarus saundersi

【選定理由】既知の生息地点数は5以下であり、個体数も20前後と少ない。

【種概要】冬鳥。全長31.5cm。キジバトとほぼ同じ大きさの小型カモメ。夏羽は頭部が黒くなる。主に干潟に渡来する。世界的希少種。

【分布】中国渤海沿岸塩性干潟で繁殖。総個体数は7,000～9,000羽で、繁殖個体群は2,500程度と推定されている。冬季は中国東シナ海海岸、朝鮮半島南端、日本へ渡る。国内での飛来は局地的で、干潟への依存性が高い。1998年に諫早湾堤防の締め切りにより、生息地が奪われ、三重県にも飛来するようになった。

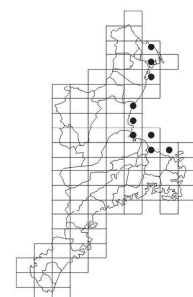
【現況・減少要因】県内では伊勢湾沿岸の河口部の干潟に渡来し、松阪市、津市、明和町、鈴鹿市などで毎年記録がある。渡来数は約20羽程度。2022年度における調査で、国内では、越冬個体としては約2,200羽の生息が確認されている。

【保護対策】採餌場である干潟を、生物が豊かになるような保全に努める。天然記念物指定、あるいは生息地をラムサール条約登録湿地にするなどの法的な保護が必要である。

【文献】15, 34。

(前澤昭彦・西村四郎)

(写真：四日市市，2022年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

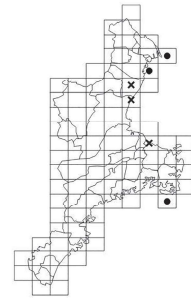
環境省 2020

VU

コアジサシ

Sternula albifrons

チドリ目 カモメ科



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

【選定理由】既知の生息地点数は 10 程度であるが、自然の繁殖環境がほとんど失われており、2019 年以来繁殖は確認できない。

【種概要】夏鳥。全長約 25 cm の小形のアジサシ。体の上面は青灰色で、下面は白色、嘴が黄色で先端が黒い。脚は橙黄色。体が細長く、ツバメのように翼が尖っており、尾羽が二股になっている。夏羽では額が白く、頭上から後頭にかけて黒い。冬羽では、額の白色部が頭頂まで広がり、嘴が黒く、脚が黒か褐色となる。飛びながら、「キリッ キリッ」と鳴く。餌は小型の魚類で、空中から狙いを付けて水中に飛び込んで捕獲し、アジサシの名前の由来となっている。広い河原や砂浜等の裸地に集団で営巣し、集団で防衛する。卵とヒナは、砂礫に似た模様がある保護色である。繁殖成功率が高いのは、およそ 3 ha 以上で植被率約 30 % 以下の裸地に、約 500 羽以上が集まった場合である。

【分布】種コアジサシは、ユーラシアから北アメリカの中緯度地帯で繁殖し、ユーラシア南部、オーストラリア、アフリカ、南アメリカで越冬する。極東の亜種コアジサシは、日本と中国東部、南部で繁殖し、東南アジアからニュージーランドで越冬する。国内では、東北地方南部以南に渡来し、繁殖する。県内では、木曾岬町から志摩市の主に海岸、中州、埋立地で繁殖記録がある。

【現況・減少要因】約30年前は全国的にも普通に見られる鳥とされていたが、自然状態の場所で繁殖に成功した最近の例は四日市市の吉崎海岸、志摩市和具大島、宮川河口中州などしかなく、一方、木曾岬干拓地、四日市市、津市などの工事中の埋立地や裸地で営巣することがまれにみられるのみである。減少要因は、ダムや井堰による河川の土砂流下阻害による河原や砂浜の減少や海岸浸食で、広い砂礫地が激減したこと。

【保護対策】現在残されている広い河原や砂浜をこれ以上破壊しないこと。海岸浸食の防止は特に重要であり、河口や沿岸の砂州は可能な限り残す対策が必要である。広い河原や砂浜を復元するには、ダムや井堰の撤去か、土砂流下可能なものに改造するしかないと考えられる。コアジサシやシロチドリなどが営巣する河原や砂浜などの裸地は、川の増水や波浪で1年に数回攪乱されることで維持されている環境であり、かく乱がないと草が生え、やがて草原に移行し、営巣ができなくなる。河原の形成や砂州の形成、砂浜の形成等、小規模な自然変化は許容するような河川整備、海岸整備を進める必要がある。具体的には、河川では高水敷は造らず、井堰やダムを統合などにより減らし、また、ダムや井堰からのフラッシュ放流などでのかく乱を行うこと。海岸では、松林を過度に植林しないこと、堤防の前面にはハマゴウなどの本来の海岸植物を生育させ、高波による海岸浸食も防止する必要がある。また、川の中州や河口や沿岸の砂州は可能な限り残す必要がある。

【文献】28, 29, 34, 36.

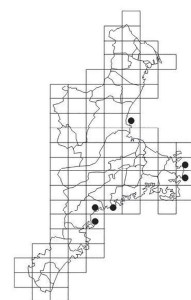
(武田恵世)

(写真：川越町，2014 年，三曾田明撮影)

カンムリウミスズメ

Synthliboramphus wumizusume

チドリ目 ウミスズメ科



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

【選定理由】県内の確実な繁殖地点は 1 ヶ所、耳穴島のみであり、繁殖個体数も少ないと考えられる。

【種概要】全長 24 cm。体の上部は青灰色、下部は白色、顔と頭頂は黒く、喉と後頭部は白い。頭頂には長い冠羽がある。外洋性海鳥である。

【分布】本種の繁殖地は日本、韓国及び極東ロシアの離島に限られる。日本では三重県耳穴島の他、宮崎県枇榔島、京都府沓島、東京都伊豆諸島などで繁殖する。推定個体数は 5,000 ~ 6,000 羽である。海に面した崖の穴で繁殖するため、繁殖つがい数の算定が難しい。繁殖期以外は外洋で過ごす。

【現況・減少理由】紀北町耳穴島で繁殖し、周辺海域で冬から春に生息する。非繁殖期の分布海域は不明。志摩半島、伊勢湾でも稀に記録される。繁殖は現在 100 つがい以下と推定される。全世界での個体数は IUCN の推定で 5,200 ~ 9,400 羽である。繁殖期は極めて敏感であり、レジャー釣りの周辺海域での高速航行が繁殖妨害になっていると考えられる。

【保護対策】繁殖地への上陸を厳しく制限する。繁殖期は周辺海域でのレジャー船の航行を制限する。繁殖地にドブネズミなどの、生息が確認されれば駆除するべきである。

【文献】10, 19, 20, 39, 42.

(平井正志)

(写真：紀北町，2023 年，西村四郎撮影)

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

藓苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

哺乳類

ササゴイ

ペリカン目 サギ科

Butorides striata

【選定理由】既知の生息地点数が2ヶ所、出現範囲が400 km²以下、開発圧力がある。

【種概要】夏鳥。全長約52 cm。成鳥は頭上が黒色、背と翼の上面は青緑色の光沢のある黒褐色で、下面は淡い紫灰色。大木や比較的高い樹林に小集団で営巣する。

【分布】アムール盆地から中国東北部、ウスリー、韓国、日本で繁殖し、マレーシア、インドネシアで越冬する。国内では、本州、四国、九州で繁殖し、九州南部では少数が越冬する。

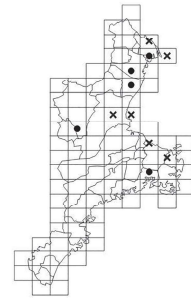
【現況・減少要因】県内では、松阪市、伊勢市などの大木のある社寺林数カ所で繁殖していたが、近年確実な繁殖記録はない。2023年は2ヶ所で観察されたのみである。減少要因は、圃場整備や川や水路の改修による魚類、水生生物の激減。また、ブラックバスやブルーギルの違法・密放流で、主な餌である小型の在来魚が激減した影響が大きい。

【保護対策】集団営巣できる大木や樹林の保護河川工事は近自然工法で行い、「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地の改良を実施し、魚類や水生生物が豊富な環境を復元すること。

【文献】28, 29, 34, 36.

(武田恵世)

(写真：川越町，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

ミサゴ

タカ目 ミサゴ科

Pandion haliaetus

【選定理由】繁殖期の既知の生息地点数は5以下、個体数は50未満。越冬期には広い範囲にみられるが、250未満の個体数しかいないと考えられる。

【種概要】おもに留鳥、冬期には越冬個体加わる。体長雄58、雌60 cm、翼開長155～175 cm、翼は細長く、尾は短い。頭部は白く過眼線が黒く、体の上面は黒褐色、下面は白く、胸に黒褐色の帯がある。雌雄同色。餌は主に大型の魚類。海岸の孤立した岩の上や樹上などで営巣する。

【分布】極地を除く全世界に分布。国内では、北海道から沖縄で少数繁殖し、冬期には北のものは南に移動する。

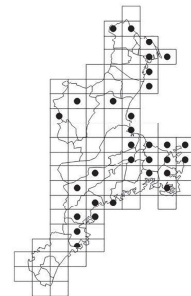
【現況・減少要因】近年確実な記録は少ない。冬期には全域の海岸で確認されている。また、伊賀盆地など内陸部でもごく少数が越冬している。減少要因は、魚類の減少、魚類を介した有害物質の体内蓄積や営巣可能な大木の減少などが考えられる。

【保護対策】海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止するとともに有害物質による環境汚染を防止する。また、営巣木となる沿岸の大木を保護、育成する。

【文献】28, 34, 36, 38.

(武田恵世)

(写真：四日市市，2015年，三曾田明撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

NT (繁殖)
VU (越冬)

環境省 2020

NT

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ハチクマ

タカ目 タカ科

Pernis ptilorhynchus

【選定理由】県内では近年減少傾向が特に著しい。250未満の個体数と考えられる。

【種概要】夏鳥。体長雄57、雌61 cm、翼開長約130 cmでトビより少し小さい。色彩は個体変異が大きく、赤色形と白色形に大別される。下面は赤褐色と白の鷹斑模様で首と尾羽が長く、翼の幅が広い。餌は主に中小型のハチ類の幼虫や両生爬虫類。

【分布】シベリア南部から中国、日本で繁殖し、中国南部から東南アジアで越冬する。日本では本州以北で繁殖。

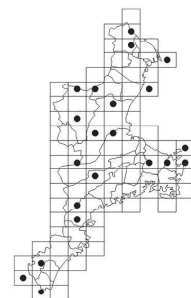
【現況・減少要因】県内の丘陵地で繁殖しているが、近年減少が著しい。減少要因は、戦後の拡大造林や開発により広葉樹林、アカマツ林が減少したために餌となるハチ類が減少し、また営巣木となる大木も減少したためと考えられる。また、近年の圃場整備と用水路や川の改修により、餌となる両生類、爬虫類の減少が著しいことも大きな要因と考えられる。

【保護対策】アカマツ林や広葉樹林などの保護、復元。「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策に基づく農地改良を実施すること。

【文献】26, 29, 32, 33, 34, 36, 37, 38.

(武田恵世)

(写真：いなべ市，2020年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

EN

環境省 2020

NT

チュウヒ

Circus spilonotus

タカ目 タカ科

【選定理由】繁殖地は木曾岬干拓地のみであるが、近年繁殖できていない。越冬地は10か所程度で、ヨシ原が発達する河口域が河川改修などで生息に適する場所が減少している。

【種概要】全長雄48cm、雌58cm、翼開長113～137cm。トビよりもやや小さく、細身のタカ。つばさを浅いV字型に保ち、ヨシ原の上空を低く飛ぶ。ネズミ類、小鳥類を捕食する。冬鳥として渡来する個体がほとんどである。

【分布】本種はユーラシア大陸東側に生息する。開けたヨシ原などの地上で営巣する日本では本県以外に北海道、青森県、秋田県、石川県、岡山県、福岡県などで繁殖する。いずれも自然のヨシ原かあるいは人工的に維持されたヨシ原である。本州での繁殖は北海道と比べて少なく、20つがい程度である。関東以西で恒常的な繁殖地は木曾岬干拓地と石川県河北潟などである。かつて大阪、山口などで繁殖が記録されたが、いずれも現在は繁殖できる環境にない。非繁殖期は南へ渡り越冬する。越冬地は河川河口付近のヨシ原である。餌場として広大なヨシ原を必要とする。本種は集団で、地上でねぐらを取ることが知られており、木曾岬干拓地、渡良瀬遊水地などが知られている。

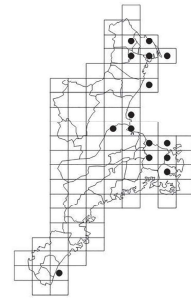
【現況・減少理由】県下での繁殖は木曾岬干拓地だけである。2010年から2019年までは繁殖に成功するつがい数は1または0であった。2020年以降は成功するつがい数は0になった。開発によって、営巣できる場所が減少したことなどが減少理由である。冬鳥として飛来する個体の越冬地は木曾川、揖斐川、長良川、雲出川、榑田川、宮川などの河口周辺のヨシ原であるが、近年、太陽光発電設置、埋め立て、河川改修などにより狭められつつある。

【保護対策】木曾岬干拓地での開発を止め、チュウヒの繁殖、越冬に適した環境を維持していく必要がある。

【文献】16, 17.

(平井正志・近藤義孝)

(写真：木曾岬町，2018年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR (繁殖)
VU (越冬)

環境省 2020

EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ハイロチュウヒ

Circus cyaneus

タカ目 タカ科

【選定理由】既知の生息地は10以下。生息地への開発圧が強い。

【種概要】冬鳥。全長雄45cm、雌51cm、翼開長99～124cm。カラス大のタカで、雄は翼の先が黒く、全身灰色で、下面は白い。雌と若鳥は淡褐色の地に黒褐色の縦斑がある。ゆっくりした羽ばたきと翼を浅いV字形に保った滑空を繰り返しながら飛び、ネズミ、小鳥類などの獲物を見つけるとすばやく地上に降りて捕まえる。

【分布】ユーラシア大陸の亜寒帯や北アメリカ大陸で繁殖し、冬は南下する。国内では冬鳥として、全国の平地から山地草原、農耕地、河川、干拓地に飛来するが局地的である。

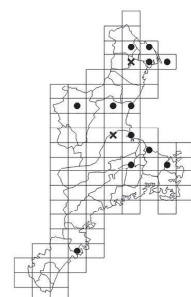
【現況・減少要因】県内では、木曾岬町、伊勢市、松阪市、桑名市などの海岸部で記録がある。安定した冬季の生息地である木曾岬干拓地のヨシ原が開発で減少している。新たな開発計画があり、さらなる減少が懸念される。

【保護対策】河口や海岸付近および河川中流域のヨシ原を保護し、採餌・ねぐら利用できる環境を作っていく。

【文献】16.

(前澤昭彦・近藤義孝)

(写真：四日市市，2016年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蕨苔類
- 藻類
- キノコ
- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

イヌワシ タカ目 タカ科
Aquila chrysaetos

【選定理由】かつて鈴鹿山脈北部で繁殖していたひとつがいは消滅し、県内で繁殖するつがいはない。稀に滋賀県側から飛来する個体が観察される。

【種概要】全長雄 81 cm, 雌 89 cm, 翼開長 170 ~ 213 cm. 大型の猛禽。成鳥では全身黒褐色。亜成鳥, 幼鳥では白色部がある。自然草原, 灌木林, 雪崩後など樹高の低い場所で, ノウサギなどを捕食する。岩棚に巣を作る。

【分布】日本では本州に生息。四国, 九州では確実な生息が確認できていない。主に山地に棲む。環境省が 2004 年に公表した推定個体数は約 650 羽で, 繁殖成功率は低く 20%内外であり。個体数はその後も減少していると見られる。

【現況・減少要因】伐採地, 幼齢植林地, 萱場などが消滅し, 狩場は減少している。さらに, 鉾山開発で, 狩場が狭められている。また, 近年のシカの増加による森林下層植生の消失は餌動物の減少を招いていると想定される。

【保護対策】生息地での鉾山開発は最小限にすべきである。シカを駆除し, 森林下層の植生回復に努める。岩手県では風力発電風車への衝突例がある。イヌワシが飛来する可能性のある場所に風車を立てるべきではない。また, 以前の営巣地周辺は改変すべきではない。

【文献】14. (平井正志)

(写真: 滋賀県, 2015 年, 笹間俊秋撮影)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR
環境省 2020	EN

コチョウゲンボウ ハヤブサ目 ハヤブサ科
Falco columbarius

【選定理由】個体数はごく少ない。越冬地である開けた農耕地の改変が続いている。

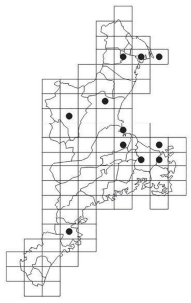
【種概要】冬鳥。全長雄 29 cm, 雌 33 cm. 翼開長 64 ~ 74 cm. 小鳥類を捕食するが, ネズミや昆虫なども狙う。開けた農耕地で越冬することが多い。地上でねぐらを取る事が知られている。チョウゲンボウに似るが, やや小さく, 羽色が異なる。チョウゲンボウのようなひらひらとした飛び方をしない。

【分布】北半球に広く分布し, 高緯度地域で繁殖し, 冬は南へ渡り越冬する。

【現況・減少原因】かつて木曾岬干拓地で大規模なねぐらが知られていたが, 現在は消滅したと考えられる。個体数はかなり少ないと推定される。木曾岬干拓地など各地の越冬地 (開けた農耕地等) の保全が必要である。農耕地の放棄により農耕地が改変され, またヨシ原や草地は遊休地として太陽光発電が建設される例が多いが, 本種の越冬に悪影響を与える。

【保護対策】開けた農耕地, 草地を維持し, これ以上改変しない。 (平井正志)

(写真: 松阪市, 2013 年, 西村四郎撮影)



三重県 2025	CR
三重県 2015	EN
環境省 2020	—

ハヤブサ ハヤブサ目 ハヤブサ科
Falco peregrinus

【選定理由】県内では繁殖期以外は生息数は比較的多いが, 繁殖個体はきわめて少ないと思われる。

【種概要】留鳥。全長雄 41 cm, 雌 49 cm, 翼開長 84 ~ 120 cm. カラスより少し小さいくらいの鳥。高速で飛翔。島嶼の断崖に営巣することが多い。近年は市街地のビルの窓辺や鉄塔の鉄骨の隙間に営巣したりする。餌は主に飛行している鳥類を足で蹴って仕留める。カラスを捕食することもある。

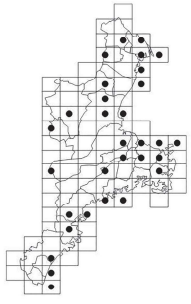
【分布】ユーラシア, アフリカ, オーストラリア, インド, 北アメリカ大陸などに生息。国内では北海道から九州, 南西諸島, 伊豆諸島などに分布する。

【現況・減少要因】県内ではごく少数が繁殖している。冬期には, 越冬個体が渡来することにより数が増え, ほぼ県内全域でみられる。釣り人などの繁殖地域への立ち寄りが安定繁殖の脅威となっていると思われる。

【保護対策】断崖で繁殖する営巣地周辺への人の立ち入りを極力抑え, 繁殖行動に脅威を与えないようにする。

【特記事項】国内希少野生動物種。
 【文献】19, 30.

(写真: 鈴鹿市, 2022 年) (前澤昭彦・笹間俊秋)



三重県 2025	CR
三重県 2015	CR (繁殖)
環境省 2020	EN (越冬)
環境省 2020	VU

ヤイロチョウ

Pitta nympha

スズメ目 ヤイロチョウ科

【選定理由】既知の生息地点数は5以下であり、生息は極めて限定的であり、個体数も少ないと推定される。

【種概要】夏鳥。全長18 cm。体は茶色、緑色、コバルト色、黄色など色彩に富む。よく茂った広葉樹林を好み、地上でミミズなどの餌を採る。特徴のある大きな声でさえずる。

【分布】日本では本州中南部、四国、九州で繁殖するが、繁殖は局地的である。近年は北上傾向にある。冬はインド、中国南部、東南アジアで越冬する。

【現況・減少原因】三重県中部以南に生息する。繁殖していると推定されるが、数は極めて少ないと推定される。広葉樹林の減少、すなわちスギヒノキの植林が生息地を狭めている。

【保護対策】生息地である広葉樹林を保全、拡大し、生息が疑われる場所では林道などの開発を制限する。野鳥写真マニアなどの影響を避けるための啓発看板を設置し、生息情報の管理を厳しくすべきである。

【文献】34。

(平井正志・西村四郎)

(写真：南伊勢町，2021年，濱屋勝則撮影)



三重県 2025

CR

三重県 2015

CR

環境省 2020

EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

トモエガモ

Sibirionetta formosa

カモ目 カモ科

【選定理由】既知の生息地点数は10以下で、個体数が500以下と考えられる。近年全国的には増加傾向にあるが、県内では個体数変動が著しい。

【種概要】冬鳥。全長約40 cm。オスの顔には黄白色と緑黒色のともえ形の斑紋がある。メスは全身褐色で黒い斑があり、嘴の根元に小白円紋がある。おもに植物食で、草の種子などを食べる。20世紀後半に世界的に数が激減し、推定個体数21万羽とされたこともあったが、近年増加傾向がみられる。

【分布】ロシア東部のタイガやツンドラの湿地で繁殖し、中国揚子江流域から朝鮮半島、日本で越冬する。国内では、主に関東地方以西で越冬する。

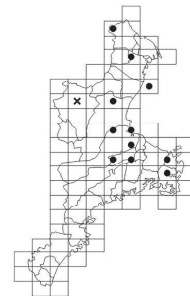
【現況・減少要因】毎年数～数百羽が越冬しており、2022年からは増加傾向にある。

【保護対策】池など現在の生息環境を保護し、水生植物が豊富な浅い水辺の環境を復元し、オシドリ同様水辺にドングリの実る樹木を育成することが必要である。

【文献】28, 29, 34, 36。

(武田恵世)

(写真：四日市市，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ヒクイナ

Zapornia fusca

ツル目 クイナ科

【選定理由】生息地のヨシ原、湿地などの生息地が減少し、個体数の減少が懸念される。

【種概要】夏鳥。全長22.5 cm。体上面は褐色、顔、体下面が赤褐色である。繁殖期には「キョッキョッキョッキョ」の特徴ある声でなく、めったに飛ばない。開けた場所にめったに出ないため、見ることは少ない。

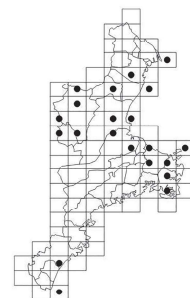
【分布】日本全土で繁殖し、冬は南へ渡る。

【現況・減少要因】県内では木曽岬町、四日市市、津市、松阪市、伊勢市、志摩市、熊野市などで記録があるが、個体数は少ない。主な生息地であるヨシ原、湿地、湿地などが減少している。これらの土地には太陽光パネルが設置され、生息環境が失われる場合も多い。また、河川改修で失われる場合がある。

【保護対策】ヨシ原の減少を防ぐ。公共事業で河川敷などのヨシ原を改変する場合には広さにかかわらず、鳥類の調査を義務付ける必要がある。失われた湿地を回復する事業が必要である。

(平井正志)

(写真：四日市市，2021年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
セン・タイ類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ミヤコドリ

Haematopus ostralegus

チドリ目 ミヤコドリ科

【選定理由】生息地点は10以下である。東アジア飛行ルートのみヤコドリは10,000羽と推定され、三重県に生息・越冬する個体数はその約1～2%であり、生息地としては大変貴重である。

【種概要】45 cm. 白と黒の羽色の大型のシギであり、嘴と足のオレンジ色がめだつ。干潟や砂浜海岸に生息し、主として二枚貝を食べる。

【分布】ユーラシア大陸に広く分布する。分布域ごとに渡りのルートが異なり、東アジア飛行ルートのみヤコドリはヨーロッパの個体群とは別の個体群でカムチャッカ半島、および韓国西岸の島嶼で繁殖し、およそ10,000羽と推定されている。近年（2019年から2021年）カムチャッカ半島でフラッグをつけられた個体が三重県で発見された。

【現況・減少理由】日本での越冬数は500羽内外である。越冬地は東京湾三番瀬付近と伊勢湾西岸に限られる。三重県では近年毎冬150羽から200羽程度が越冬する。観察される場所は安濃川河口、松坂港、高松海岸などである。越冬する個体もあり、主に繁殖に参加しない若年個体と思われる。

【保護対策】河口周辺、自然砂浜海岸をこれ以上改変しない。アサリなどの二枚貝の生息環境を維持する。

【文献】2, 15, 22, 23, 27, 28.

(平井正志)

ヘラシギ

Calidris pygmaea

チドリ目 シギ科

【選定理由】10年前まで県内ではほぼ隔年に渡来を認め、近年渡来は認められないうが記載しておくこととした。世界的に絶滅の危機にあり、本県は重要な渡来地であると考えられるためである。

【種概要】全長 14～16 cm. 嘴は黒く、短く先がへら状である。胸部から腹部が白く、夏羽は頭部から胸部にかけて赤褐色で暗色斑がある。冬羽は上面が白い灰色、頭部から胸部にかけて白い。嘴を左右に振って泥や砂の中にある甲殻類を捕らえる。全世界での生息数は1997年時点で約4,000羽と推定されていたが、2015年では140～480羽と推定されている。

【分布】シベリア東部からカムチャッカ半島で繁殖し、中国南東部からインド北東部で越冬する。日本には渡り途中で渡来し、採餌する。県内では伊勢湾岸の泥質干潟に渡来し滞在する。

【現況・減少要因】伊勢湾岸の泥質干潟で10年前まではおおよそ隔年に渡来を認めたが、泥質干潟が河川や海岸の浚渫工事などで消滅したり、砂質化したりした影響で、減少傾向にあると考えられる。

【保護対策】干潟、特に泥質干潟の保護。

【文献】22, 23, 24, 27, 28, 29, 34.

(武田恵世)

ミユビシギ

Calidris alba

チドリ目 シギ科

【選定理由】生息地点は5程度であり、生息は砂浜海岸、河川の河口部に限られる。豊津浦・町屋浦でかつては200羽程度がほぼ毎年観察されたが、近年は減少し、100羽程度である。

【種概要】全長 20 cm. 冬羽では背が明るい灰色、夏羽では顔から胸にかけて赤茶色の斑点が出る。干潟にはあまり出ず、砂浜海岸の波打ち際でヨコエビなどの甲殻類などを採餌する。

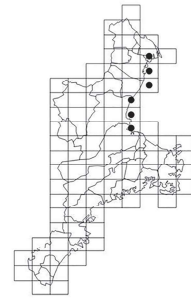
【分布】北半球全域に広く分布をする。日本に飛来する個体は東アジア飛行ルートに属し、シベリアタイミル半島周辺で繁殖する。日本での越冬もあるが、オーストラリアまで渡り、越冬するものが多い。日本での生息地は限られ、千葉県九十九里浜で多くの個体が観察されている。

【現況・減少理由】三重県の個体数は年により変化するが、数十羽から100羽程度が津市の海岸で観察され、減少傾向を示している。長距離を渡る種であり、種々の要因によって突然減少することがありうる。また、繁殖地での温暖化の影響を受ける可能性もある。

【保護対策】自然砂浜海岸を減少させない。自然海岸に松や園芸植物を植えない。また、海岸で休息する個体にむやみに近づかないよう周知する。

(平井正志)

(写真：鈴鹿市、2023年、笹間俊秋撮影)



三重県 2025

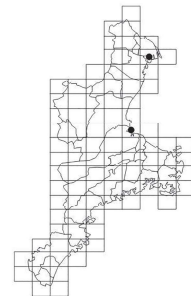
EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

—



三重県 2025

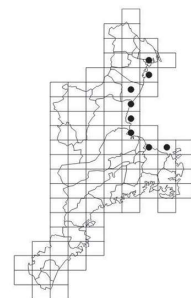
EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

CR



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ハマシギ
Calidris alpina

チドリ目 シギ科

【選定理由】近年、東アジア飛行ルート群は中継地、越冬地の環境変化により個体群が減少傾向にある。県内でも海岸の環境悪化で減少。

【種概要】全長 21 cm. 冬羽では背が灰白色の細かいまだら模様、夏羽では頭と翼が赤っぽく、腹が黒くなる。砂浜海岸の波打ち際で甲殻類などを採餌する。

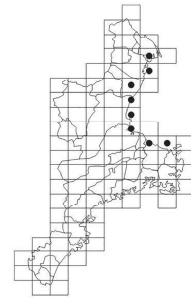
【分布】北半球全域に広く分布。日本に飛来する個体は東アジア飛行ルートに属し、シベリアからアラスカ北部周辺で繁殖。越冬は北半球の中・低緯度へ、日本で越冬するものも多い。

【現況・減少理由】三重県の個体数は年により変化、津市などの海岸などで観察される。東アジア飛行ルートの個体群は中継地、越冬地の生息地が消失するなどが原因で減少傾向にある。

【保護対策】自然砂浜海岸を減少させない。また、海岸で休息する個体にむやみに近づかないよう周知する。

(笹間俊秋)

(写真：四日市市，2023年)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 苔苔類
- 藻類
- キノコ

ヒメウ
Urile pelagicus

ペリカン目 サギ科

【選定理由】県内の沿岸で毎年少数の越冬が認められ、500未満の個体数しかないと推定される。

【種概要】全長63~73 cm, 翼開長91~102 cm. 日本に分布するウ科では最小種。体形が細く、全身青や紫の光沢がある黒色。雌雄同色。冬羽は目元は黒色だが、夏羽は赤色の肌が露出する。主に岩礁海岸に生息し、魚類、甲殻類などを捕食する。

【分布】オホーツク海南部、カムチャツカからサハリン、日本で繁殖し、冬季は南に移動する。国内では、北海道と東北地方北部の一部で繁殖し、越冬期は北海道から東シナ海で越冬する。

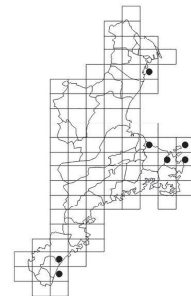
【現況・減少要因】主に伊勢湾口付近と熊野灘の外洋に面した岩礁海岸で毎年少数の越冬が観察され、ごく少数の越冬も確認されている。餌資源である小型の魚類の減少などが減少原因と考えられる。

【保護対策】岩礁海岸や島嶼の現在の生息環境を保護し、海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止する必要がある。

【文献】29, 28, 34, 36.

(武田恵世)

(写真：鳥羽市，2024年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	—
環境省 2020	EN

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

ヨシゴイ
Ixobrychus sinensis

ペリカン目 サギ科

【選定理由】県内で繁殖していると考えられるが記録が少なく、全国的にも生息数が減少している。

【種概要】全長36.5 cm. 翼開張53 cm. 上面は褐色、下面は淡黄色、翼は淡褐色で後が黒い。虹彩は黄色。嘴は橙色。水上のガマ、ヨシなどの植物を束ねた巣を作り、警戒すると体を細長く伸ばして草に擬態する。

【分布】インドから東南アジア、日本、中国東北部、ロシアに生息し、日本のより北のものは、冬期は南に渡る。日本では主に夏鳥で、九州以北で繁殖する。本州中部以南では越冬例もある。県内では、桑名市、四日市市、松阪市、多気町、御浜町で記録がある。

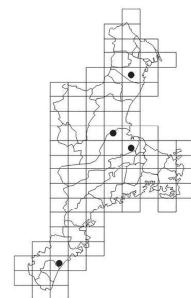
【現況・減少要因】護岸工事などによるガマ、ヨシ原など水辺の植物の減少。

【保護対策】ヨシ、ガマなどが生えるヨシ原など水辺の植物の保護。

【文献】28, 29, 34.

(武田恵世)

(写真：松阪市，2024年，西村四郎撮影)



三重県 2025	EN
三重県 2015	NT
環境省 2020	NT

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

クマタカ

Nisaetus nipalensis

タカ目 タカ科

【選定理由】 県内の山地帯では広く生息するが、個体数は少ない。20~40 km²に1つがい程度で生息している。全国的には1,800を超える程度の個体数であろうと思われる。

【種概要】 留鳥。全長雄72 cm, 雌80 cm, 翼開長140~165 cmの大型のタカ。アカマツ, モミなどの大木に壘一壘ほどの巨大な巣を作る。

【分布】 日本列島から中国南部ヒマラヤ, インド南端部, スリランカに分布。日本では、全国に留鳥として生息する。

【現況・減少要因】 県内では各地で繁殖しているが、減少傾向にある。林道建設や風力発電施設の設置などの大規模な工事は繁殖への脅威となっている。また、広葉樹林の減少により、本種の餌となる鳥類や小中型哺乳類、ヘビなどが減少、営巣木となる大木も減少している。

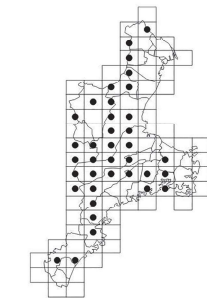
【保護対策】 スギ, ヒノキ人工林は広葉樹林への転換を促進させ、本種の餌資源を多様に保てるよう豊かな生態系を再構築していく。近年大径木に生育したスギに営巣することが増えてきているので、大径木の針葉樹の保護にもつとめる必要がある。

【特記事項】 国内希少野生動植物種。

【文献】 19, 30, 40, 41。

(前澤昭彦・笹間俊秋)

(写真: 四日市市, 2023年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

EN

オオタカ

Accipiter gentilis

タカ目 タカ科

【選定理由】 県内には比較的広く分布するが、関東地方とは違って減少傾向にある。

【種概要】 留鳥。体長雄50 cm, 雌57 cm, 翼開長105~130 cmとカラスより少し大きい。背面は暗青灰色で下面は黒と白の鷹斑模様で翼の幅が広く尾羽が長い。森林性で、餌は主に小鳥類。樹高約10 m以上のアカマツ林に営巣することが多い。

【分布】 北半球の中緯度地域に広く分布。国内では、北海道, 本州, 四国で繁殖し、秋冬には全国で見られる。

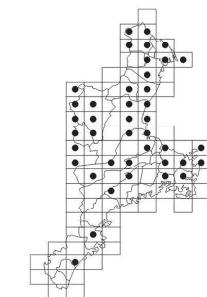
【現況・減少要因】 県内では、桑名市, 松阪市, 伊賀市, 南伊勢町, 尾鷲市, 御浜町はじめ全域に生息しており、繁殖期には20か所程度で確認されている。近年さらに減少傾向にあり、伊賀地方では数年で半減している。冬期は北の地方から越冬個体が渡ってくるので個体数が増える。減少要因は、開発による生息地の消滅、営巣木となる大木や餌である鳥類等の減少、農薬の体内蓄積などと考えられている。

【保護対策】 営巣木となる大木や、生息地となる広葉樹林やアカマツ林など鳥類の多い自然環境の保護、復元が必要である。

【文献】 14, 21, 26, 28, 29, 33, 34, 36, 37。

(武田恵世)

(写真: 四日市市, 2019年, 笹間俊秋撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

サシバ

Batastur indicus

タカ目 タカ科

【選定理由】 県内に広く分布するが、近年、減少傾向が著しい。250未満の個体数しかいないと考えられる。

【種概要】 夏鳥。体長約50 cm, 翼開長約100 cm。カラスくらいの大きさで、オオタカに似るが、全身赤褐色。カエルなどの両生類や爬虫類、昆虫類をおもな餌としている。三重県の中央構造線沿いは渡りの重要な経路にあたる。

【分布】 アムール地方南部から日本で繁殖し、東南アジアで越冬する。国内では、青森県以南で繁殖する。八重山諸島では留鳥である。

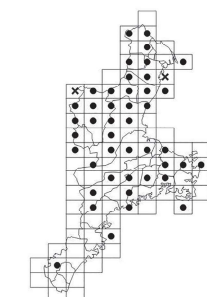
【現況・減少要因】 県内の丘陵地帯で広く繁殖しているが、近年、減少が著しい。減少の原因は、圃場整備や河川改修で、川や水路が垂直に近いコンクリート張りにされ、カエル類の往来が遮断され、両生爬虫類が激減したことやアカマツ林や広葉樹林の減少と考えられる。また、丘陵地などに設置された太陽光パネルのために営巣地や採餌地への影響が大きい。

【保護対策】 「環境保全を重視する農林水産業への移行」に基づく、農地の改良を早く実施し、両生爬虫類を増やし、自然林を保全し、復元する必要がある。

【文献】 32。

(武田恵世・笹間俊秋)

(写真: 四日市市, 2021年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

VU

ウチヤマセンニュウ

Locustella pleskei

スズメ目 ウグイス科

【選定理由】既知の生息地点は5以下である。繁殖する場所が離島だけであり、限られている。

【種概要】夏鳥。全長 17 cm。離島の灌木地、草むらで営巣し、昆虫類を捕食する。近縁のシマセンニュウと極めてよく似ている。繁殖期には繁殖地で識別できるが、渡りの時期に野外で識別するのは不可能である。捕獲すれば嘴の形状などで、区別が可能である。

【分布】日本列島、朝鮮半島、ロシア日本海岸の離島で繁殖する。冬は中国南部へ渡る。

【現況・減少要因】県内では志摩半島以南の無人の離島、和具大島、和具小島、耳穴島、(紀北)大島、尾鷲市寺島などで少数が繁殖するとされていたが、現在確認できるのは和具大島、和具小島などだけである。釣り人の上陸などは繁殖に悪影響があると考えられる。和具大島にはドブネズミが生息している。繁殖に大きな影響を与える可能性がある。

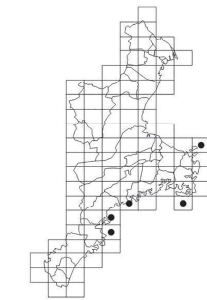
【保護対策】離島のドブネズミを駆除する。また、ドブネズミの侵入を防ぐ。レジャー海釣りによる離島への上陸は繁殖を妨害するので、繁殖期における上陸を制限すべきである。また、繁殖地である離島の植生の変化を監視する。

【特記事項】県指定希少野生動物種。

【文献】25。

(平井正志)

(写真：志摩市，2023年，西村四郎撮影)



三重県 2025

EN

三重県 2015

EN

環境省 2020

EN

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

コマドリ

Larvivora akahige

スズメ目 ヒタキ科

【選定理由】既知の生息地は10程度である。生息環境である標高約1,000 m以上の落葉広葉樹林とその林床の茂みに変化が見られる。

【種概要】全長 14 cm。夏鳥。雄は頭部から胸が赤褐色、胸の下部は暗灰色、背と尾もやや鈍い赤褐色。雌も雄に似るが全体に色が鈍い。標高の高い落葉広葉樹林下の藪に生息し、めったに姿を現さない。オスは大きな特徴のある声でさえざる。

【分布】九州以北で繁殖し、冬は中国南部などに渡る。

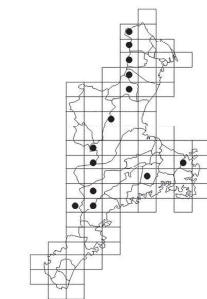
【現況・減少要因】鈴鹿山脈、台高山脈など標高の高い広葉樹林で繁殖する。高見山地やその南側の標高の高い山地でも記録されている。渡り時期には平野に近い森林でも記録がある。落葉広葉樹林の減少、ニホンジカによる植生の変化、特に下生えの減少などで、生息環境が奪われている。1990年代から2010年代にかけて個体数は減少傾向にある。

【保護対策】標高の高い山地における落葉広葉樹林の再生、植生の復活を図る。ニホンジカの食害を防ぐ。

【文献】36。

(平井正志・三曾田明)

(写真：菰野町，2021年)



三重県 2025

EN

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

コクガン

Branta bernicla

カモ目 カモ科

【選定理由】既知の生息地点数が10以下で、50未満の個体数と考えられる。

【種概要】冬鳥。全長約 61 cm。上面黒色で、頸に不規則な白斑があり、下腹部から上・下尾筒は白い。主に植物食で、干潟でアマモなどの海藻や底生生物を食べる。

【分布】シベリア東部の北極圏で繁殖し、日本列島沿岸や黄海沿岸で越冬する。国内では、おもに北海道、東北地方に飛来し、西日本では少ない。三重県が恒常的な越冬地の南限と考えられる。

【現況・減少要因】高松海岸、津市安濃川河口干潟、松阪市五主海岸、宮川河口、紀北町銚子川河口(近年まれ)など数ヶ所の干潟のいずれかで毎年少数が越冬している。もともと渡来数は少ないが、港湾開発や海洋汚染の進展により減少する可能性がある。

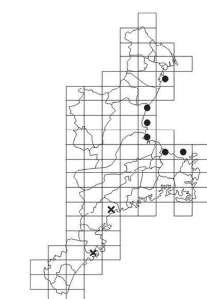
【保護対策】アマモ場、干潟などの現在の生息環境を保護すること。藻場の破壊や沿岸流を変化させるような安易な干潟造成や浚渫の防止、水質汚濁を防止し、海藻が生育できる透明度の高い海を維持し復元する必要がある。

【特記事項】国指定天然記念物。三重県で毎年越冬している唯一のガン類である。

【文献】28, 29, 34, 37。

(武田恵世)

(写真：松阪市，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ
EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

ツクシガモ

Tadorna tadorna

カモ目 カモ科

【選定理由】冬季に定期的に飛来はするが、飛来地点数は少なく、個体数も少ない。

【種概要】冬鳥。全長62.5 cm。マガモより大きく、干潟や内湾に生息する。

【分布】ユーラシア大陸に分布し、九州・有明海を中心に群れが見られ、少数が西日本に分散して渡来する。

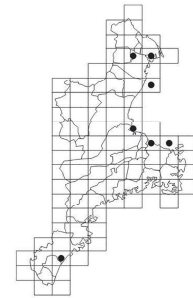
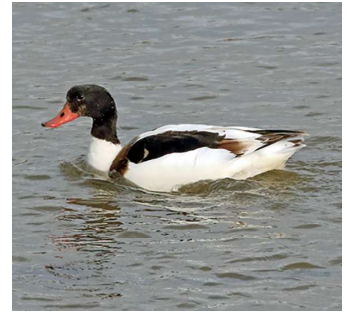
【現況・減少要因】県内では、伊勢湾岸域の木曾岬町、川越町、四日市市、津市、松阪市、伊勢市で確認されている。減少要因は、不明なところがあるが、貝などの動物食が主で海藻類も食べるので、採食場所となる環境が必要。

【保護対策】海水域を好み干潟に生息するため、干潟環境の保全が必要である。

【文献】34。

(西村四郎)

(写真：川越町，2018年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

—

環境省 2020

VU

ナベヅル

Grus monacha

ツル目 ツル科

【選定理由】推定個体数は12,000羽とされているが、その9割が九州の出水市に飛来し、越冬する。集中越冬地で、伝染病などのアウトブレイクが起これると、種自体の存続が危ぶまれる。近年、県中部の海岸部に少数が継続的に飛来するようになり、日本で分散して越冬することが本種の維持には欠かせないため、本県の越冬地は非常に重要である。

【種概要】全長96.5 cm。体は黒灰色で頭部と首は白い。目の上に赤班がある。

【分布】九州の出水市、山口県などに飛来する。三重県では、松阪市から伊勢市にかけての海岸部の水田に飛来する。

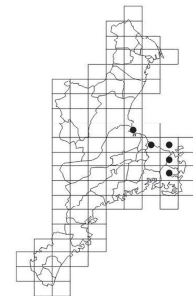
【現況・減少要因】少数が一定地に留まり、越冬したり、中勢地域の海岸に近い水田を移動したりして越冬する。水稲の二番穂などを採食している。近年は収穫後に耕起をする水田が増えており、餌の確保が難しい。

【保護対策】飛来が確認されると、銃猟や人の立ち入りを制限するなどの措置が必要。地権者以外の農道利用を制限するなど、地元との調整が必要である。ぬぐらであるヨシ原の保護も必要である。

【文献】34。

(前澤昭彦・西村四郎)

(写真：愛知県，2015年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

タゲリ

Vanellus vanellus

チドリ目 チドリ科

【選定理由】生息地点は20程度である。県内では比較的多く確認されているが、生息環境の悪化が見られる。

【種概要】冬鳥。全長31.5 cm。体上面と翼は金属光沢を持つ、緑色である。頭部に冠羽がある。休耕田、水田、河川に飛来し、地上の小動物を食べる。

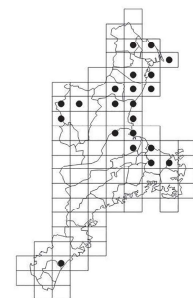
【分布】ユーラシア大陸温帯、亜寒帯で繁殖し、冬は南へ渡る。

【現況・減少原因】県内では伊勢平野各地、伊賀地方、熊野市で記録されている。数羽から十数羽の群が多く、数は多くない。水田の耕作方法が変化し、乾田化し、餌となる小動物が冬に少なくなったことが減少の原因であろう。また、河川改修で河川中下流域に水の貯留する部分が少なくなったことも影響しているであろう。

【保護対策】冬に水田に水を貯め、餌動物を増やす。河川に湛水する部分を残す。

(平井正志・近藤義孝)

(写真：松阪市，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

イカルチドリ
Charadrius placidus

チドリ目 チドリ科

【選定理由】 県内の砂礫の川原が比較的広い河川では比較的多く確認されているが、東紀州では確認できない。生息および繁殖に適した裸地化した河原が減少している。

【種概要】 留鳥。体長 20.5 cm。上面はうすい茶褐色で下面は白い。近縁のコチドリに似ているが、少し大きく目のまわりのリングが細い。主な餌は水生生物である。河川の中流から上流の中洲や河原の砂礫地に営巣する。感潮域より下流では少ない。

【分布】 ウスリー地方、中国東北地区、朝鮮半島などに分布。中国南部からミャンマーにかけて越冬する。国内では本州、四国、九州などで繁殖する。

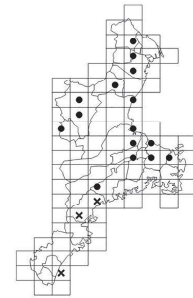
【現況・減少要因】 県内では、各地の河原が比較的広い河川にごく少数生息している。冬期は越冬個体加わる。減少要因は広い河原や餌となる水生生物などの減少。また、営巣場所への人の立入りによる繁殖阻害などである。

【保護対策】 井堰などを転倒式など貯まった土砂が流れ出る構造に改修し、広い河原が維持されるようにすること。また、営巣場所への人の立入りを制限することも必要である。

【文献】 7, 28, 29, 34, 36.

(武田恵世)

(写真：菰野町，2022年，三曾田明撮影)



三重県 2025	VU
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

ホウロクシギ
Numenius madagascariensis

チドリ目 シギ科

【選定理由】 既知の渡来地点数10以下であり、近年県内では潮干狩りが禁止になったところが多く、その分貝採りによる干潟への人の立ち入りは減少したが、渡来数は少なく、越冬個体はほぼいない。

【種概要】 旅鳥。全長61.5 cmで嘴は非常に長く、干潟に生息する。

【分布】 カムチャッカ半島、東北シベリア、中国東北地区などで繁殖し、東南アジア、オーストラリアなどで越冬する。国内では、旅鳥または冬鳥として全国に渡来する。

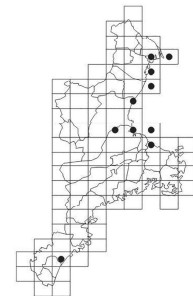
【現況・減少要因】 2022年度における全国調査では、渡りの時期である春期で56羽、秋期で37羽の生息が確認されているだけである。県内では木曾岬町、川越町、桑名市、四日市市、松阪市、伊勢市、御浜町などの干潟や水田付近に記録がある。減少要因は、生息場所である干潟が減少傾向にあり、貝採り以外のレジャーによる生息地への人の立入りが多くなったことがあげられる。

【保護対策】 干潟の保全と開発防止。また、人の利用制限区域の設定が必要である。特に、干潟の大規模な変化をもたらす工事などについては、本種の飛来時期は避けるようにするなどの配慮が必要。

【文献】 15, 34.

(前澤昭彦・西村四郎)

(写真：四日市市，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025	VU
三重県 2015	NT
環境省 2020	VU

ダイシャクシギ
Numenius arquata

チドリ目 シギ科

【選定理由】 既知の渡来地点数は10以下。干潟、砂浜に渡来するが、生息に適した環境が減少している。

【種概要】 旅鳥・冬鳥。全長 60 cm でコサギとほぼ同じ大きさの大型のシギ。全身褐色の濃淡模様がある。くちばしが特に長く、下に湾曲している。カニ類を好んで食べる。

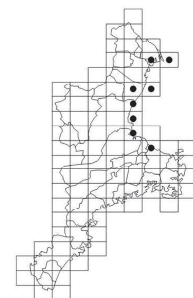
【分布】 ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯地域で繁殖し、冬は地中海沿岸、アフリカ大陸、ユーラシア南部に渡る。国内では、北海道、本州、四国、九州、沖縄に渡来する。

【現況・減少要因】 中勢地域の干潟に渡来し、川越町、四日市市、津市、松阪市、伊勢市などで確認されている。開発などにより生息環境が減少している。

【保護対策】 干潟の保全と、生息地での人の利用制限区域の設定が必要である。

(前澤昭彦・三曾田明)

(写真：松阪市，2009年，西村四郎撮影)



三重県 2025	VU
三重県 2015	VU
環境省 2020	—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

アカアシシギ *Tringa totanus*

チドリ目 シギ科

【選定理由】主として松阪市五主海岸付近で記録され、個体数は全国的に少なく、また三重県でもごく少ない。

【種概要】全長 27.5 cm. 秋と春に干潟、淡水の水路などに飛来する。近縁のツルシギに似るが、次列風切りが白く、飛ぶと識別できる。また、ツルシギは下嘴だけが赤いが、アカアシシギでは両方が赤くなる。

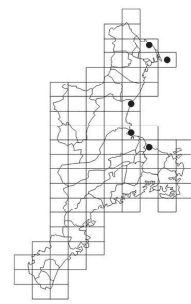
【分布】ユーラシア大陸温帯で繁殖し、アフリカ、東南アジアで越冬する。日本では少数が北海道東部野付半島などの湿原で繁殖する。

【現況・減少理由】木曾岬町、津市、松阪市、伊勢市などで記録がある。松阪市五主海岸にはほぼ毎年記録されるが、2、3羽程度である。木曾岬町、伊勢市では近年記録がない。全国的にも飛来数は少なく、数十羽から100羽程度である。生息地の河口域での生息環境の悪化が見られる。また、榑田川、金剛川河口周辺の湿地、水路も埋め立てられつつある。

【保護対策】干潟、河口部を改変しない。五主海岸、榑田川、金剛川周辺などの堤防より陸地よりの湿地、水路は現状のまま残すべきである。

(平井正志)

(写真：松阪市，2014年，西村四郎撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

チュウサギ *Ardea intermedia*

ペリカン目 サギ科

【選定理由】既知の生息（集団繁殖）地点数が10以下で、集団営巣地の適地が減少している。

【種概要】夏鳥。一部越冬。体長約 68.5 cm，コサギよりは大きく、ダイサギよりはかなり小さい。嘴の長さはコサギよりも短い。他のサギ類とともに集団営巣し、餌は魚介類や昆虫類。

【分布】ユーラシア、アフリカ、オーストラリアの熱帯から温帯に分布。国内では、本州から九州で繁殖。

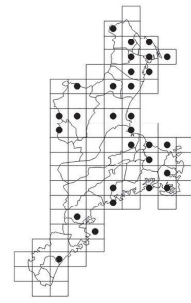
【現況・減少要因】県内では、四日市市、伊賀市、鈴鹿市、津市、伊勢市などで繁殖し、ほぼ全域で生息。減少要因は、圃場整備や河川工事による魚類、水生生物の激減や農薬の影響。ブラックバスやブルーキルの捕食による小型在来魚の激減、河畔林の激減などが生息環境の悪化を招いているためであると考えられる。

【保護対策】集団営巣地やねぐらとなっている河畔林や池、海に隣接する水辺の森林を保護するとともに、悪臭などの人的被害が出ないような対策を立てる必要がある。また、近自然工法と「環境保全を重視する農林水産業への移行」政策の推進をはかる必要がある。

【文献】28, 29, 34, 36.

(武田恵世)

(写真：四日市市，2014年，三曾田明撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

NT

アオバズク *Ninox japonica*

フクロウ目 フクロウ科

【選定理由】既知の生息地点数は比較的多いが、営巣環境が悪化している。

【種概要】夏鳥。全長27~30.5 cm，翼開長66~70.5 cm。中型のミミズクであるが、耳羽がない。褐色の頭と金色の目、下面は白地に褐色の太い縦斑がある。平地の林や神社の森などに生息し、樹洞に営巣する。夜間に活動し、セミやコガネムシなどの昆虫類、稀に小鳥やネズミを餌とすることもある。「ホッホッ、ホッホッ」と2音ずつ区切って鳴く。

【分布】ユーラシア大陸東部のウスリーからインド、東南アジアで繁殖し、北部のものは、冬期、東南アジアに移動する。国内全域で繁殖し、沖縄では越冬もする。

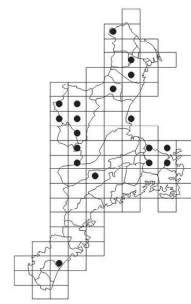
【現況・減少要因】県内ではほぼ全域で記録があるが、営巣場所となる大木の減少により、繁殖が脅威にさらされている。また、カラス類により繁殖妨害も生じている。

【保護対策】神社や公園、河畔林などの大木を保護し、営巣場所を確保する。また必要に応じて巣箱をかける。

【文献】36.

(前澤昭彦・三曾田明)

(写真：東員町，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

アカショウビン

ブッポウソウ目 カワセミ科

Halcyon coromanda

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

【選定理由】 既知の生息地点数は20以下である。

【種概要】 夏鳥，全長 27.5 cm. 全身明るい赤褐色で，腰に水色の部分がある。サワガニ，カエル，大型昆虫などを捕食する。樹洞に営巣し，ヒロロロロロと特徴のある声で鳴く。

【分布】 国内は北海道から沖縄まで全国に分布する。奄美以南では個体数が多いが，本州では数が少ない。

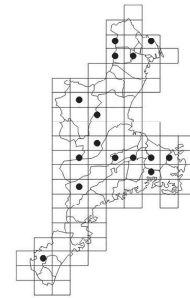
【現況・減少理由】 県下では桑名市，いなべ市，菰野町，津市，伊勢市，鳥羽市などで記録がある。溪流に沿った林が林道工事，砂防工事などで失われる場合がある。また，営巣できる樹洞を持つ木が不要な木として伐採される場合があるほか，近年県内で野鳥撮影マニアが巣の周辺にたむろしたことによる繁殖放棄例がある。

【保護対策】 溪流周辺の植生，樹林を保護すべきである。繁殖情報については野鳥写真マニアに伝わらないよう注意すべきである。

【文献】 36.

(平井正志・近藤義孝)

(写真：松阪市，2017年，西村四郎撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヤマセミ

ブッポウソウ目 カワセミ科

Megaceryle lugubris

【選定理由】 目立つ種類で河川の比較的目的立つ場所に生息しているにもかかわらず記録が非常に少なく，約10年前より少なくなっており，生息地である河川環境の更なる悪化が見られる。

【種概要】 体長約38 cm. 翼開長約67 cm. 日本のカワセミ科の鳥では最大の種類である。頭には大きな冠羽があり，からだの背中側が白黒の細かいまだら模様になっているのが特徴。腹側は白いが，あごと胸にもまだら模様が帯のように走っている。オスとメスはよく似るが，オスはあごと胸の帯にうすい褐色が混じる。

【分布】 アフガニスタン北東部からヒマラヤ，インドシナ半島北部，中国中部以南，日本に分布。日本では，留鳥として九州以北に分布。

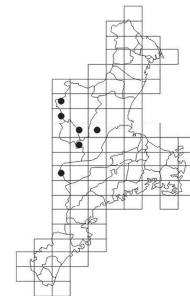
【現況・減少要因】 三重県では繁殖記録はほとんどなく，伊賀地方では近年繁殖期には1つがい，越冬期には例年2～3羽が確認されている。水質の良い比較的水量の多い上流域に少数見られ，越冬期はやや数が増える。

【保護対策】 河川の水質浄化，土の崖の保護，堤外地（堤防の間）など河川区域内での河川のかく乱による地形変化のある程度の許容。

【文献】 28，29，34，36.

(武田恵世)

(写真：松阪市，2014年，西村四郎撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

オオアカゲラ

キツツキ目 キツツキ科

Dendrocopos leucotos

【選定理由】 既知の生息地点数は多いが，個体数は少ない。近年の落葉広葉樹林の減少にともない，減少傾向にある。

【種概要】 留鳥，一年を通じてほとんど移動しない。全長 28 cm であり，近縁のアカゲラに似るがやや大きく，下面に黒い縦斑があること，背面の白斑の模様が異なることで識別できる。

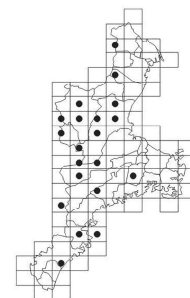
【分布】 国内では西日本と北海道に多く，関東，東北には少ない。広葉樹林，混合林を好む。アカゲラと異なり，渡りはしない。

【現況・減少理由】 個体数は少なく，生息地点が限られている。山地で見られ，平地林で見られることはあまりない。キツツキ類はスギ・ヒノキの植林地で見るとは稀で，主として広葉樹林で餌を枯れ木に潜む，昆虫の幼虫や，アリを食べることが多い。

【保護対策】 落葉広葉樹林を拡大する。

(平井正志)

(写真：四日市市，2022年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

コルリ

Larvivora cyane

スズメ目 ヒタキ科

【選定理由】生息環境である落葉広葉樹林とその林床の植生がシカの食害で大きな変化が見られる。

【種概要】夏鳥。全長 14 cm。オスは上面が暗青色，下面が白色，メスは上面がオリーブグリーン。広葉樹林の低層の茂みに棲み，姿を見ることは難しい。繁殖期は主に昆虫を食べる。

【分布】日本，ロシアアムール川流域，バイカル湖周辺，モンゴル北部などで繁殖し，冬はインドシナ半島，スマトラ，ボルネオなどで越冬する。日本中部地方では主に標高の高い場所で繁殖する。

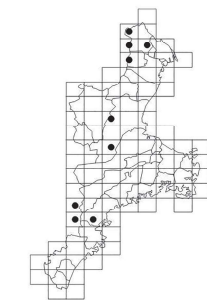
【現況・減少傾向】県内では鈴鹿山脈の稜線付近で繁殖していたが，現在ではほとんど見られない。大台ヶ原山系では現在も繁殖している。その他の山系では調査されていない。ただ，渡りの途中の個体は鈴鹿山麓など各地で見られる。もともと生息数は多くない。近年シカの食害で，林内のスズタケなど低層植生が失われている場所が多く，主な減少原因であろうと懸念される。

【保護対策】シカの食害を防ぐ必要がある。生息地である広葉樹林は改変すべきでなく，むしろ拡大すべきである。

【文献】36。

(平井正志)

(写真：長野県，2014年，西村四郎撮影)



三重県 2025

VU

三重県 2015

VU

環境省 2020

—

ヤマドリ

Syrmaticus soemmerringii

キジ目 キジ科

【選定理由】県内に広く分布し確認記録も多いが，自然林の減少や人工林化により生息環境が悪化してきている。

【種概要】留鳥。全長雄 125 cm，雌 52.5 cm，キジと同じくらいの大きさで，全身に赤褐色の斑紋を持つ。尾はキジより長く，赤と黒の横帯が並ぶ。雌は全体に淡い褐色。よく茂った自然林で，地上の草の種子や果物，昆虫などを食べる。地上に巣を作る。

【分布】日本固有種。国内では，本州から九州のよく茂った山地に生息する。

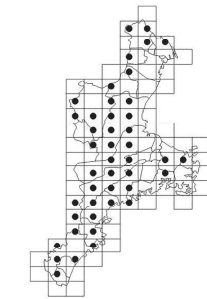
【現況・減少要因】県内ではほぼ全域にわたって記録があるが，生息適地である自然林の減少と狩猟圧により個体数は減少している。なお，1976年から雌は狩猟対象から外されているが，雄への狩猟圧は高い。

【保護対策】雄も狩猟対象から除外する法的対策が必要である。また，現存の広葉樹林を積極的に保護するとともに，放置されて利用されていない人工林は広葉樹林への転換をはかる。

【文献】19，30。

(前澤昭彦・笹間俊秋)

(写真：松阪市，2009年，西村四郎撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

セイタカシギ

Himantopus himantopus

チドリ目 セイタカシギ科

【選定理由】全国的に数が少ない。県下でも飛来地がごく限られている。

【種概要】全長 37 cm。翼，背が黒く，体は白い。長いピンク色の脚が特徴の水鳥。湿地に棲み，水中の甲殻類，小魚を捕食する。家族群で行動することが多い。

【分布】広く温帯および熱帯で繁殖し，北で繁殖するものは南へ渡る。日本では主として冬鳥，各地の干潟，湿地に飛来する。近年は周年生息する場合も多い。1975年に愛知県で初めて繁殖が確認され，それ以降，いくつかの繁殖例がある。

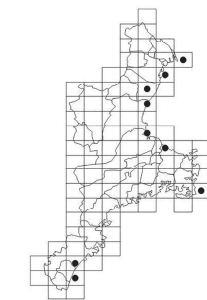
【現況・減少理由】シギ・チドリ調査では春，秋に全国で100羽程度が記録されている。三重県ではかつて15羽程度が滞在し，四日市と松阪で繁殖成功例が2例あったが，松阪の繁殖地は太陽光パネル設置で失われた。生息地である干潟，湿地の環境が悪化している。

【保護対策】干潟，湿地の現状を維持する，あるいは以前の繁殖地を復元する。人や捕食者が容易に近づけない繁殖可能な場所を確保する。

【文献】1，11，22，23，24，27。

(平井正志)

(写真：松阪市，2017年，西村四郎撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

CR

環境省 2020

VU

タカブシギ
Tringa glareola

チドリ目 シギ科

【選定理由】旅鳥または冬鳥として水田、蓮田、湿地に渡来するが、湿地の減少（休耕田、耕作放棄地は増えているが乾いた草地になる例が多い。）に伴い近年渡来数が激減している。

【種概要】旅鳥。全長 21.5 cm, 小型のシギで、水田などの淡水域に生息する。

【分布】中央シベリアなどで繁殖し、東南アジア、アフリカ南部などで越冬する。国内では、旅鳥として渡来する。

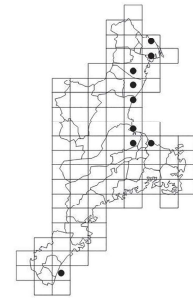
【現況・減少要因】2022年度における全国調査では、渡りの時期である春期で55羽、秋期で74羽の生息が確認されているだけである。県内では特に桑名市、四日市市、松阪市、伊勢市などの干潟や水田付近に記録がある。減少要因は、生息場所である湿地が減少傾向にあることがあげられる。

【保護対策】耕作放棄地の防止による湿地の保全。また、土地の大規模な変化をもたらす工事（太陽光発電施設等）については配慮が必要。

【文献】15, 34.

(西村四郎)

(写真：松阪市，2017年)



三重県 2025	NT
三重県 2015	—
環境省 2020	VU

ツルシギ
Tringa erythropus

チドリ目 シギ科

【選定理由】旅鳥として水田、蓮田、湿地に渡来するが、湿地の減少（休耕田、耕作放棄地は増えているが乾いた草地になる例が多い。）に伴い近年渡来数が激減している。

【種概要】旅鳥。全長 32.5 cm, 中型のシギで、嘴・足が長い。夏羽は全体が黒色になる。

【分布】北シベリアなどで繁殖し、東南アジア、アフリカ中部などで越冬する。国内では、旅鳥として全国に渡来する。

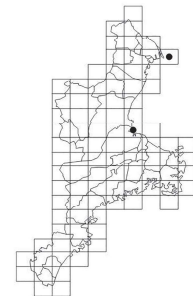
【現況・減少要因】2022年度における全国調査では、渡りの時期である春期で33羽、秋期で5羽の生息が確認されているだけである。県内では特に桑名市、松阪市などの干潟や水田付近に記録がある。減少要因は、生息場所である湿地が減少傾向にあることがあげられる。

【保護対策】耕作放棄地の防止による湿地の保全。また、ヨシ原など湿地の大規模な変化をもたらす工事などは避けるようにするなどの配慮が必要。

【文献】15, 34.

(西村四郎)

(写真：松阪市，2020年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025	NT
三重県 2015	—
環境省 2020	VU

クロサギ
Egretta sacra

ペリカン目 サギ科

【選定理由】既知の生息地点数はおよそ20ヶ所。50未満の個体数しかないと推定される。

【種概要】留鳥。全長 62.5 cm. 嘴は太くて長く、足は比較的短い中形のサギ。黒色型と白色型があるが、九州から本州には黒色型が多く、南西諸島以南は白色型が多い。岩礁海岸に生息し、磯の波打ち際で魚、エビ、カニ、貝類などを捕食する。繁殖期は5～6月で断崖の岩の隙間に小枝を運び込んで巣をつくる。

【分布】東南アジアからオーストラリアにかけて広く分布する。国内では、本州以南では留鳥として分布し、東北地方以北、北海道では夏鳥である。

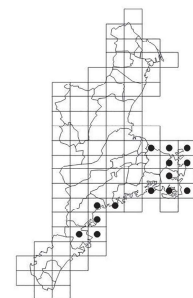
【現況・減少要因】県内では、鳥羽市、紀北町の離島で繁殖記録があるが、現況は未確認。非繁殖期には、志摩半島から熊野灘沿岸にかけての沿岸でも生息する。繁殖環境や餌資源の減少が減少要因と考えられる。近年、全国的に減少傾向にある。

【保護対策】繁殖状況の確認が急務である。また、岩礁海岸や島嶼の現在の生息環境を保護し、海洋資源の持続的活用を進め、魚介類の減少を防止する必要がある。

【文献】3, 5, 6, 28, 29, 34, 36, 37.

(武田恵世)

(写真：鳥羽市，2017年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025	NT
三重県 2015	NT
環境省 2020	—

- 哺乳類
- 鳥類
- 爬虫類
- 両生類
- 汽水・淡水魚類
- 昆虫類
- クモ類
- 貝類
- 甲殻類
- その他動物
- 維管束植物
- 蘚苔類
- 藻類
- キノコ

- EX
- EW
- CR
- EN
- VU
- NT
- DD

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

ハイタカ

Accipiter nisus

タカ目 タカ科

【選定理由】 既知の生息地点数はおよそ30か所、生息環境は悪化している。

【種概要】 冬鳥。体長雄32 cm、雌39 cm、翼開長100~130 cm。オオタカより小型で、眉斑が細いことで区別できる。森林性で、高木の樹上に営巣する。小鳥類が主な餌である。全国的に減少傾向にある。

【分布】 北半球の中緯度地域に広く分布。国内では本州中部以北で繁殖し、渡りの時期の春秋と冬期には全国でみられる。

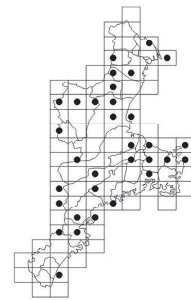
【現況・減少要因】 県内では、冬期にはほぼ全域で少数がみられる。繁殖期である4月の確認もあるが、確実な繁殖は県内では確認されていない。減少要因は、戦後の拡大造林政策や開発によりアカマツ林や広葉樹林が減少したこと、餌である小鳥類が減少したこと、農薬の体内蓄積などと考えられている。

【保護対策】 アカマツ林や広葉樹林など小鳥類の多い自然環境を保護、復元すること。また、放棄されて木材としては役に立たない状態となっているスギ、ヒノキ人工林は広葉樹林に転換する必要がある。

【文献】 28, 29, 33, 34, 37.

(武田恵世)

(写真：菰野町，2022年，三曾田明撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

NT

コミミズク

Asio flammeus

フクロウ目 フクロウ科

【選定理由】 既知の生息地点数は数か所、生息環境の悪化が著しい。

【種概要】 冬鳥。全長35~41 cm、翼開長94~104 cm。地上性のフクロウで、平地から、農耕地、河原、埋め立て地などに飛来する。主に夜間に活動するが、昼間にも活動することがある。ネズミなどを捕食し、ねぐらを地上とする。

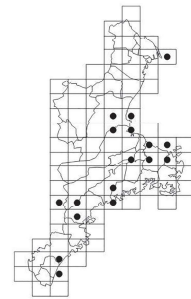
【分布】 ユーラシア大陸、北アメリカ大陸の寒帯、亜寒帯地域で繁殖し、冬はヨーロッパ南部、北アフリカへ、アジアではインドから日本にかけて移動する。国内では、冬鳥としてほぼ全国的に渡来するが、少ない。

【現況・減少要因】 県内では、木曾岬町、松阪市、伊勢市、大紀町、熊野市などのヨシ原や草地、開けた農耕地などで記録がある。ヨシ原などが減少し、さらに餌となる小動物も減少している。

【保護対策】 河川や河口部のヨシ原草地などの環境保全に努める。また、農耕地では、本種の餌となる小動物を増やすことが必要である。

(前澤昭彦・近藤義孝)

(写真：木曾岬町，2011年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

フクロウ

Strix uralensis

フクロウ目 フクロウ科

【選定理由】 既知の生息地点数は比較的多いが、営巣環境の悪化が著しい。

【種概要】 留鳥。全長48~52 cm、翼開長94~102 cm。夜行性で、主に森林に生息。「ホッホ ゴロスケ ホッホ」という太い声で繰り返し鳴く。

【分布】 ユーラシア大陸の温帯、亜寒帯地域に広く分布。国内では九州以北で繁殖している。

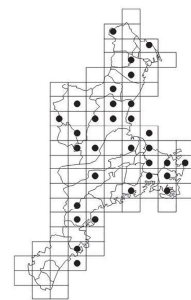
【現況・減少要因】 県内ではほぼ全域で確認されている。減少要因は、営巣可能な大木が減少している。餌となる小動物の減少も原因と考えられる。近年、切り株などの地上に営巣する事例もあり、樹洞のあるような大木の営巣木の不足は本種の個体数維持に深刻。

【保護対策】 営巣可能な樹洞ができるような大木の保護。広葉樹林や採食地である周辺の農耕地を含めた里山環境の保全が必要である。2024年現在、四日市を中心とした巣箱をかけるプロジェクトが活発であり、有効性も確認されている。

【文献】 36.

(前澤昭彦・三曾田明)

(写真：菰野町，2023年，笹間俊秋撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

サンショウクイ

スズメ目 サンショウクイ科

Pericrocotus divaricatus

【選定理由】生息地点は20ヶ所未満である。

【種概要】夏鳥。全長 20 cm。体は細く、後頭部、翼、尾は黒く、背、上尾羽は青灰色、下面、額は白い。森林の樹冠の上部で生活し、昆虫などを捕食する。

【分布】日本、朝鮮半島、ロシア沿海地方、中国東北部などで繁殖し、フィリピン、ボルネオ、中国南部、インドシナ半島で越冬する。沖縄では越冬する。

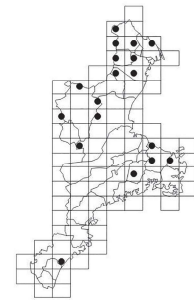
【現況・減少理由】1970年代から1990年代にかけては全国的に減少傾向だったが、2010年代は一転して大幅に増加傾向となっている。

【保護対策】現在知られている飛来地の現状を維持する。天然林を拡大する。

【文献】36.

(平井正志・三曾田明)

(写真：菰野町，2019年)



三重県 2025

NT

三重県 2015

VU

環境省 2020

VU

哺乳類

鳥類

爬虫類

両生類

汽水・淡水魚類

昆虫類

クモ類

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

苔菌類

藻類

キノコ

サンコウチョウ

スズメ目 カササギヒタキ科

Terpsiphone atrocaudata

【選定理由】既知の生息地点数が100以下で、減少傾向にあるため。

【種概要】全長は雄が44.5 cm (繁殖期)、雌が17.5 cm。繁殖期のオスは、体長の3倍ぐらいの長い尾羽を持ち、羽色は、顔面部が黒紫色、腹部は濁白色、背面はやや赤みのある黒紫色、その他の部分は暗黒紫色で、アイリングと嘴は明るい水色である。メスは、オスの色彩とほぼ同色であるが、オスと比較してアイリングと嘴の水色は不明瞭で、背部と尾部は赤みの強い赤褐色。尾羽は体長と同じくらい。

【分布】日本、台湾、フィリピンのバタン島とミンダナオ島に分布。日本では夏鳥。

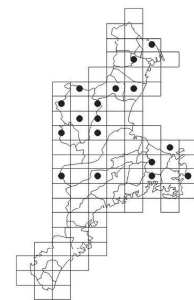
【現況・減少要因】伊賀地方では繁殖期の記録が2005年度4か所から2015年度は2か所に減少しており、以後増加を認められない。県内全体でも減少傾向にあると考えられる。

【保護対策】広葉樹林、特に照葉樹林の保護。

【文献】28, 29, 34, 36.

(武田恵世)

(写真：菰野町，2014年，三曾田明撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD

クロツグミ

スズメ目 ヒタキ科

Turdus cardis

【選定理由】生息環境の悪化により減少が懸念される。

【種概要】全長 21.5 cm。ツグミよりやや小さく、オスは頭、背、翼が黒く、胸は白く黒斑がある。メスは赤褐色である。オスは高木の梢でさえずる。地上でミミズなどを採餌する。

【分布】ほぼ全国の山地に夏鳥として飛来し、繁殖する。冬はインドシナ半島で越冬する。

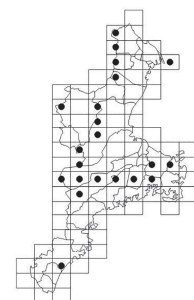
【現況・減少理由】県内では鈴鹿山脈、布引山地、度会山系、高見山地、大台が原山系などに広く分布する。しかし、広葉樹林の消失、減少に伴い、減少傾向にあると考えられる。また、シカの食害による、低層林、林床の植生の喪失による環境変化も懸念される。

【保護対策】広葉樹林の保全、放棄人工林の広葉樹林への転換を図る。シカの食害を防ぐ。

【文献】36.

(平井正志)

(写真：長野県，2013年，西村四郎撮影)



三重県 2025

NT

三重県 2015

NT

環境省 2020

—

哺乳類	ウズラ <i>Coturnix japonica</i>	キジ目 キジ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 VU
鳥類	四日市、津、伊勢、紀北町の記録は1950年代のもの。近年、志摩市等で観察例があるが、ごく稀な鳥である。				
爬虫類	(平井正志)				
両生類	ヨタカ <i>Caprimulgus jotaka</i>	ヨタカ目 ヨタカ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 NT
汽水・淡水魚類	県内各地の山地に生息する夏鳥。夜行性、かつ目立たない羽色のため、生息が十分に把握されていない。				
昆虫類	(平井正志)				
クモ類	ハリオアマツバメ <i>Hirundapus caudacutus</i>	アマツバメ目 アマツバメ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
貝類	旅鳥、尾が短く弓型の大型のアマツバメで飛行速度が速い。県内中南勢で記録あり、伊賀では毎年観察される。				
甲殻類	【文献】21, 28, 29, 33, 34, 36。				
その他動物	(武田恵世)				
維管束植物	クイナ <i>Rallus indicus</i>	ツル目 クイナ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 NT	環境省 2020 —
蘚苔類	近年、北勢地方で記録があるだけ。単独行動し、個体数は少ないと考えられ、かつ生息環境は悪化している。				
藻類	(平井正志)				
キノコ	バン <i>Gallinula chloropus</i>	ツル目 クイナ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
EX	少し前まで全国的に普通種だったが伊賀で約10年前より激減を確認、全国調査でも激減確認のため精査が必要。				
EW	【文献】21, 26, 28, 29, 34, 36。				
CR	(武田恵世)				
EN	タマシギ <i>Rostratula benghalensis</i>	チドリ目 タマシギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 NT	環境省 2020 VU
VU	留鳥。繁殖期に、雌が夜に囀る。年度の全国繁殖調査で木曾岬町、鈴鹿市、松阪市、度会町などで観察された。				
NT	【文献】36。				
DD	(近藤義孝)				
	オジロトウネン <i>Calidris temminckii</i>	チドリ目 シギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 —
	冬鳥。以前の越冬地、松阪市中村川中流では近年見られない。現在県内で継続的な越冬地は見出されていない。				
	(平井正志)				
	オオジシギ <i>Gallinago hardwickii</i>	チドリ目 シギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 NT
	春秋の渡りの時期に県下の水田や湿地に渡来する。7月から8月に他種に先がけて県内へ飛来することがある。				
	(前澤昭彦・笹間俊秋)				
	ウミスズメ <i>Synthliboramphus antiquus</i>	チドリ目 ウミスズメ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 EN	環境省 2020 CR
	近年確実な記録がない。約10年以前は沿岸で少数の群の確認あり。主に洋上に生息する種全般の精査が必要。				
	【文献】28, 29, 34, 37。				
	(武田恵世)				

ヘラサギ <i>Platalea leucorodia</i>	ペリカン目 トキ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
---	-----------	----------------	---------------	---------------

三重県にも少数が飛来し、四日市市で越冬記録もあるが幼鳥か若鳥の場合が多く短期の滞在になる。
(笹間俊秋)

クロツラヘラサギ <i>Platalea minor</i>	ペリカン目 トキ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 CR	環境省 2020 EN
--	-----------	----------------	----------------	----------------

三重県ではほぼ毎年、1羽が金剛川、櫛田川河口付近に飛来する。
(平井正志・三曾田明)

ミゾゴイ <i>Gorsachius goisagi</i>	ペリカン目 サギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 VU	環境省 2020 VU
--	-----------	----------------	----------------	----------------

近年県内の記録がなく、全国的にも減少。広葉樹林特に溪畔林の減少が問題と考えられる。詳しい調査が必要。
【文献】26, 28, 29, 34, 36。
(武田恵世)

ゴイサギ <i>Nycticorax nycticorax</i>	ペリカン目 サギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
---	-----------	----------------	---------------	---------------

約20年前はサギ類で最も多い種であったが、伊賀はじめ県下でも全国調査でも激減しているため、精査が必要。
【文献】21, 26, 28, 29, 34, 36。
(武田恵世)

コノハズク <i>Otus sunia</i>	フクロウ目 フクロウ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 VU	環境省 2020 —
-----------------------------------	-------------	----------------	----------------	---------------

夏鳥。小型のフクロウで夜に「ブッポウソウ」となくことが知られている。津市内での観察記録はある。
(近藤義孝)

オオコノハズク <i>Otus semitorques</i>	チドリ目 シギ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 —
---	----------	----------------	----------------	---------------

留鳥。「ボーボー」と鳴くフクロウ。夜行性で声が小さく観察記録は少ない。津市、桑名市などで記録がある。
(近藤義孝)

ブッポウソウ <i>Eurystomus orientalis</i>	ブッポウソウ目 ブッポウソウ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 DD	環境省 2020 EN
---	-----------------	----------------	----------------	----------------

夏鳥。大杉谷、三重大学演習林で1950年代の記録がある。現在県内での繁殖は知られていない。
(平井正志)

メボソムシクイ <i>Phylloscopus xanthodryas</i>	スズメ目 ムシクイ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
---	------------	----------------	---------------	---------------

以前はメボソムシクイの亜種とされていたオオムシクイの情報が少数あるが、メボソムシクイはほとんどない。
(三曾田明)

オオムシクイ <i>Phylloscopus examinandus</i>	スズメ目 ムシクイ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 DD
--	------------	----------------	---------------	----------------

春秋に河川敷や平野の森林で観察されているが、以前はメボソムシクイの亜種とされていたため情報がない。
(三曾田明)

哺乳類
鳥類
爬虫類
両生類
汽水・淡水魚類
昆虫類
クモ類
貝類
甲殻類
その他動物
維管束植物
蘚苔類
藻類
キノコ

EX
EW
CR
EN
VU
NT
DD

哺乳類	キクイタダキ <i>Regulus regulus</i>	スズメ目 キクイタダキ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 VU	環境省 2020 —
鳥類	全国の針葉樹林帯で繁殖し，冬には低地でも見られる．県内でも冬に観察例があるが稀． (三曾田明)				
爬虫類					
両生類	マミジロ <i>Geokichla sibirica</i>	スズメ目 ツグミ科	三重県 2025 DD	三重県 2015 —	環境省 2020 —
汽水・淡水魚類	県内で繁殖していないと思われるが，秋に青山高原を通過する．春も県内を通過していると思われる． (平井正志)				
昆虫類					
クモ類					
貝類					
甲殻類					
その他動物					
維管束植物					
蘚苔類					
藻類					
キノコ					
EX					
EW					
CR					
EN					
VU					
NT					
DD					

文 献

- 1 安藤宣朗. 2008. 三重県で観察されたセイタカシギの繁殖記録. しろちどり, 59: 3-7.
- 2 Dmitry Dorofeev. 2020. カムチャツカ半島西岸の重要湿地とミヤコドリの標識. しろちどり, 103: 2-6.
- 3 橋本太郎. 1959. 熊野灘沿岸地方の哺乳類・鳥類. 吉野熊野伊勢志摩両国立地域拡張調査. pp. 37-52. 三重県吉野熊野伊勢志摩国立公園区域拡張促進協議会, 津.
- 4 橋本太郎. 1988. 伊勢地方の野鳥について. 三重動物学会会報, 10/11: 22-28.
- 5 樋口行雄. 1975. 耳穴島. 特定鳥類等調査報告書: pp.185-223. 環境庁, 東京.
- 6 樋口行雄. 1982. 尾鷲地域の鳥類相. 尾鷲地域野生生物調査報告書. pp.143-186. 尾鷲地域野生生物調査会・三重県自然科学研究会, 尾鷲・津.
- 7 平井正志. 1999. 三重県中部河川でのイカルチドリの繁殖. Strix, 17: 77-83.
- 8 平井正志・橋本富三・西村泉・坂口 守・大西幸枝・中村洋子・橋本祐子・秋田由美子. 2000. 三重県中部の自然海岸におけるシロチドリの繁殖. Strix, 18: 45-53.
- 9 平井正志. 2009. 豊津浦・町屋浦の野鳥. しろちどり, 61: 5-9.
- 10 堀内 弘. 2014. 堀内弘大いに語る紀伊長島の海と鳥. しろちどり, 79: 1-5.
- 11 今井光昌. 2012. セイタカシギ繁殖記録. しろちどり, 73: 1-2.
- 12 市川雄二. 1990. 3 鳥類. 四日市市史第1巻資料編 自然, pp.281-288. 四日市市環境部環境保全課, 四日市.
- 13 環境庁. 1981. 日本産鳥類の繁殖分布. 大蔵省印刷局, 東京, 554pp.
- 14 環境省自然環境局野生生物課. 2012. 猛禽類保護の進め方(改訂版) —特にイヌワシ、クマタカ、オオタカについて—. 環境省自然環境局野生生物課, 東京
- 15 環境省自然環境局. 2023. モニタリングサイト1000シギチドリ類調査2022年度総括報告書. 生物多様性センター: 11-12.
- 16 近藤義孝. 2019. 木曾岬干拓地鳥類生息調査報告. しろちどり. 102: 2.
- 17 近藤義孝. 2023. 木曾岬干拓地で久しぶりにチュウヒの繁殖行動. しろちどり. 117: 4.
- 18 倉田 篤・池山雅也. 1963. 鈴鹿山脈の鳥類. 鈴鹿山脈自然科学調査報告書, pp.65-82. 三重県自然科学研究会, 津.
- 19 倉田 篤. 1971. 紀伊長島の鳥類. 三重県紀伊長島町, 54 pp.
- 20 倉田 篤・樋口行雄. 1971: 紀伊長島の鳥類. 54pp. 紀伊長島町, 紀北.
- 21 前澤昭彦. 2004. 第3節鳥類相. 上野市史自然編. pp. 516-537. 上野市, 上野.
- 22 守屋年史. 2012. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 76 pp.
- 23 守屋年史. 2013. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 68 pp.
- 24 守屋年史・伊奈達雄. 2014. モニタリングサイト1000シギ・チドリ類調査平成25年度冬期調査報告. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 69 pp.
- 25 永田尚志. 2008. ウチヤマセンニュー. Bird Research News, 5(5): 2-3.
- 26 日本野鳥の会. 2004. 鳥類繁殖分布調査報告書. 環境省自然環境局生物多様性センター, 富士吉田, 343 pp.
- 27 西村四郎・三曾田明・笹間俊秋・平井正志. 2023. 三重県鳥類目録シギ・チドリ編 2023. 日本野鳥の会三重, 津.
- 28 日本野鳥の会三重. 会報誌「しろちどり」野鳥記録・探鳥会報告. しろちどり.
- 29 日本鳥学会(鳥類目録編集委員会). 2024. 日本鳥類目録 改訂第8版. 日本鳥学会. 東京. 472pp.
- 30 杉浦邦彦. 2001. 第2項 鳥類. 紀勢町史自然編. pp.137-171. 紀勢町, 紀勢.
- 31 清水 善吉・堀内 弘・市川雄二. 2022. 熊野灘島嶼および周辺海域の鳥類. 南紀生物. 64(1).
- 32 武田恵世. 1989. 日本列島におけるタカの渡り. Strix, 8: 35-123.
- 33 武田恵世. 2004. 上野市の希少鳥類. 上野市史自然編: pp. 538-553. 上野市, 上野.
- 34 高野伸二. 2015. フィールドガイド日本の野鳥 増補改訂新版. 日本野鳥の会, 東京.
- 35 寺西敏夫. 1986. 多度町南部丘陵地における脊椎動物相. 養老山脈南部丘陵地(古野地区)自然科学報告書. pp.15-49. 北勢自然科学研究会. 桑名.
- 36 植田睦之・植村慎吾. 2021. 全国鳥類繁殖分布調査報告 日本の鳥の今を描こう 2016-021年. 鳥類繁

哺乳類

鳥類

殖分布調査会。

爬虫類

37 植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑. 2023. 全国鳥類越冬分布調査報告 2016—2022年. 特定非営利活動法人バードリサーチ・公益財団法人日本野鳥の会.

両生類

38 若林郁夫・中村みつ子. 2004. 三重県におけるミサゴの目撃記録. 三重自然誌, 8/9/10: 29—32.

汽水・淡水魚類

39 若林郁夫・中村みつ子・岡 由佳里. 2005. 三重県の海岸に漂着したウミスズメとカンムリウミスズメ. 三重の生き物だより, 27: 2—3.

昆虫類

40 山下善平・樋口行雄・山本和彦・増井憲一・順川 恒・大迫義彦・真崎 健・吉田浩美. 1982. 大台山系国設鳥獣保護区保護管理計画策定基礎調査報告書. 三重県農林水産部林業事務局, 津, 58 pp.

クモ類

41 山階鳥類研究所. 2002. 神宮鳥類生息調査報告書, 神宮司庁営林部, 伊勢, 135 pp.

42 山本裕. 2010. カンムリウミスズメ. Bird Research News, 7(9) : 4—5.

貝類

甲殻類

その他動物

維管束植物

蘚苔類

藻類

キノコ

EX

EW

CR

EN

VU

NT

DD